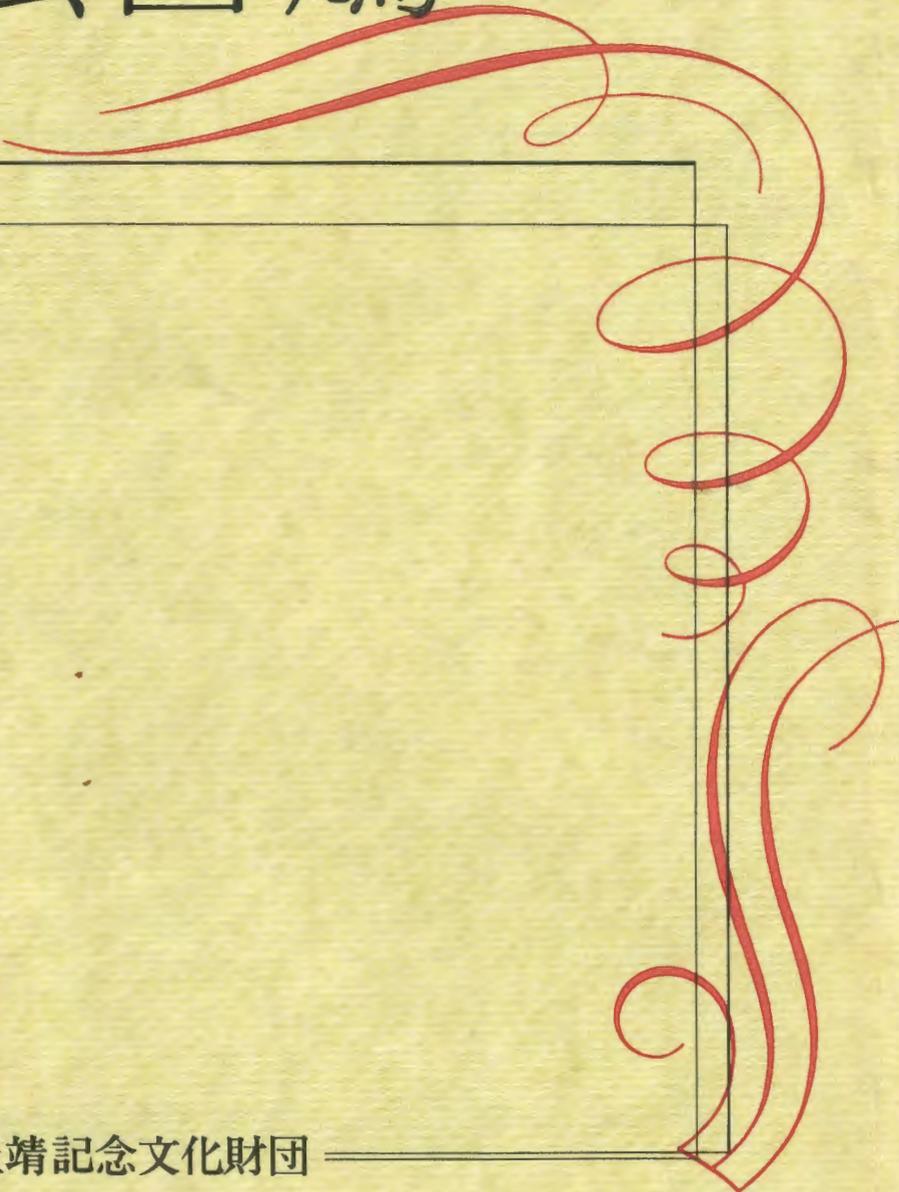


# 伝書鳩

第5号

井上靖記念文化財団





詩・雪の札幌・讃

井上 靖

一

近況報告

井上 ふみ

三

人民友好使者・井上先生

白土 吾夫

五

吹雪の中に花を握って翳そうか

米田 省三

九

夏草冬濤の舞台の中で

澤田 角江

一四

下北半島『海峡』の文学碑

瀬戸口 宣司

一七

「しろばんばの像」が完成

二二

第五回・井上靖文化賞贈賞 梅原猛氏に

二三

特集・井上靖の国内旅行一覽表

黒田佳子

五〇

鳩のお知らせ

四八

平成九年度・事業報告

井上修一

四五

湯ヶ島町読書感想文コンクール

中野かほり

四二

詩と小説の間

森井道男

三九

私の備忘録より

浦城いくよ

三三

井上隼雄さんの思い出

鈴木之夫

二九

『来館者ノート』から

美馬鷹

二五

雪の札幌・讚

井上靖

冬の札幌はいい。うつすらと雪をかぶると、札幌は

二倍の大きさになる。時計台も、広場も、花壇も、

洋館も、みんな二倍の大きさになる。荷馬車も、荷

馬車の影も大きくなる。

冬の札幌はいい。ふかぶかと雪をかぶると、札幌は

童話の都になる。積木の煙突から煙りが出、いろ紙の空にいろ紙の雲が浮かぶ、若い男はみんな王子になり、娘たちはみんな王女になる。

冬の札幌はいい。しんしんと吹雪に包まれると、札幌は哲学の街になる。地下室の集会所にソクラテスが顔を出し、向うの辻をマント姿のピタゴラスが歩いて行く。子供たちは暖炉のそばで、トランプで星を占っている。

# 「伝書鳩」五号から

## 近況報告

井上ふみ

私は九月二十八日に八十八歳になった。

孫が九人いる。一番上と、真ん中と、一番末が娘だ。間に男子六人となる。配置はよくできていると思う。

靖死去後、直ぐから一人となった私の用心棒として、七年間を一緒に住んでくれていた社会人となつてゐる男の子が、いつの間にか三十一歳になつて、この六月に結婚。同じ世田谷に小さな家庭を持つた。

次の用心棒として、大学生の方良（かたら・靖が命名）と、次郎とのいとこ同志の二人が、代わるがわる泊まることになった。

方良は空手、次郎は柔道で、悪漢が来たらやつつけてやると頼もしいことを言ってくれてゐる。

色白で金髪染め、冒険好きの方良は、九月初めから、カナダのユーコン川をカヌーで、どことかまで下った。

引き続きアラスカエスキモー部落訪問は、卒論の取材とか。万一迷子になった場合は救助のひとに、自分の居場所の緯度、経度だけは、はっきりと報告せよ、と注意して出した。

薄い茶髪を縞に染めた次郎は、バイオ部とかで、今朝、日曜日でも、十八羽の鶏の餌つけをするために、学校に出かけた。

それぞれが携帯電話を持っていて、「気分でも悪くなったら、直ぐに電話をください」とも言うてくれている。

数日前に、花の球根をいろいろ沢山頂いたので、

花畑を拡張した。早々植えようと思う。来春は美しい花々が庭を飾ってくれると、楽しみにしている。蝶も悦んでくれるだろう。

野菜の方は、今年は、蒔いても蒔いても大不作。それでも次はと、精を出すので、おかげで天にも負けず元気でおります。

平成十年十月五日。

中秋の明月の日、残念ながら曇り。

(井上靖記念文化財団 理事長)

# 人民友好使者・井上先生

白<sup>し</sup>土<sup>ら</sup> 吾<sup>の</sup>夫<sup>り</sup>

中国には勲章がない。そのかわり、称号というものがある。井上先生の中国との関係は、徹頭徹尾民間交流であった。外国人を対象にした民間交流の称号の最高のもものは、中国人民対外友好協会の贈る「人民友好使者」である。井上先生は日本人としては初めて、一九九一年四月二十九日、この称号を受けられた。記憶のよい人は、オヤと思

うであろう。この年の一月に井上先生は亡くなられている。そうなのだ。対外友協はこの年の「桐の花（井上先生のお好きな花）が盛りとなるころ」に井上先生を北京にお招きし、盛大な贈呈式と祝賀会を催すことを考えていたのだった。先生があまりにも早く逝去されたので、対外友協は、訪中した日中文化交流協会代表団の団長であった千田

是也代表理事に榮譽証書と人民友好使者章を渡し、遺族への伝達を依頼した。この授与式には韓叙会長をはじめ楚図南、趙樸初、孫平化、林林の諸先生など、多くの著名なる人士が出席した。私も出席する榮に浴した。

この追贈にこそ、井上先生の中国との係わりの真骨頂を見ることが出来る。中国では、殉職以外には、追贈は稀である。その稀なことが行われたのが井上先生なのである。

井上先生は、一九五七年以来一九八八年まで、中国訪問は二十七回に上っている。(その中の十九回、私は随行した。) その一回々々は珠玉のような旅行であり、日中友好とアジアの安定、延いては世界の平和に貢献したことは計り知れない。それを詳述することは、今は暇がないので、心に浮かぶことを書き記してみよう。

鑑真和上と言えば、奈良の唐招提寺を開いた知る人ぞ知る高僧であったが、中国では知っている人は少なかった。

それが、井上先生が「天平の薨」を「中央公論」の一九五七年三月号から八月号まで連載され、十二月に中央公論社から単行本として刊行され、翌一九五八年二月芸術選奨文部大臣賞に選ばれるに至って、日中双方で爆発的関心呼び起し、一九六三年には日中それぞれに「鑑真和上円寂千二百年記念会」が発足することとなった。もちろん、中国でも翻訳出版された。その後「天平の薨」は一九七九年に映画化され、ますます人口に膾炙するようになった。

鑑真和上についての尊崇と知識と現代的意義を日中の多くの人々の心の中に確固たるものにした功績は、一に井上先生に帰せらるべきものと言えよう。

敦煌、楼蘭は今や知らない人はないほど有名であり、敦煌を訪れた日本人は多い。しかし、この敦煌、楼蘭も、井上先生が一九五八年、一九五九年に作品「敦煌」、「楼蘭」を発表され、一九六〇年一月これによって毎日芸術大賞を受けられたことを契機として広く江湖の関心を集めるに至り、一九八八年には映画「敦煌」の完成公開を見るに至った。敦煌展も一九五八年以来数次にわたって行われ、その都度大方の好評を博した。因みに、井上先生の最初の敦煌訪問は一九七八年である。シルクロード上の大拠点、敦煌の歴史的意義と現代的価値を学術的観点と文学的立脚点から多くの人に伝えた功績もまた、井上先生のものであるといつて過言ではあるまい。

井上先生は長いこと「孔子」を書くとおっしゃっていた。畢生の仕事とお考えだったのかも知れない。そうだとすると「孔子」の完成は少しでも

遅いほうがいい。遅ければ遅いほど先生は長生きしない訳にいかないからである。しかし、とうとう「孔子」は書かれてしまった。一九八七年六月から一九八九年五月まで「新潮」に連載され、八年九月には単行本として新潮社から刊行され、一九八九年にはこれによって野間文芸賞を贈られ、一九九〇年には中国で翻訳出版された。

世界の四聖人の一人、孔子を知らない人は居ないと言ってもよいであろう。しかし、『論語』全篇を読んだ人はそれほど多くはあるまい。井上先生の「孔子」を読めば孔子の全てが分かる。孔子の足跡を辿る旅を八一年から八八年まで六回にわたって敢行し、中国の孔子学の碩学泰斗と意見を交換し、各地に密着している研究者とも懇談を重ねた結果であるから、書籍から得たものとは一味違った資料に基づいたものといえることができるのである。

孔子を新しい角度から紹介した井上先生の功績

は大きい。

井上靖先生の日中文化交流に残された偉業は、

鑑真和上、敦煌、孔子に止まるものではない。しかし、この三つについて考察しただけでも、「人民友好使者」の称号の意味はわかるであろう。

なお、この際、声を大にして強調したいのは、

井上ふみ夫人の協力である。井上先生の訪中には、ほとんど同行され、井上先生が一回一回の旅行から最大の成果を収めるよう、碎身の注意を払われた。お酒の飲み方一つとってみても、乱れはしないが、量はものすごい先生であるから、健康保持は旅行中の重大問題であったのである。ふみ夫人の緩急自在のコントロールがなければ、そもそも二十七回の訪中そのものが成立しなかったであろう。旅行中、井上先生の御都合のわるい時には、代って宴会に出席し、御挨拶をされたことも

あった。井上先生以上だ、とのカゲノコエ？もあったとか。

日中文化交流協会は一九五六年三月に創立された。その創立発起人に御参加いただきたくお願いに上がったのが、私が先生のお宅を訪問した最初である。私の記憶にまちがいがなければ、お宅は大井町だったように思う。先生は創立発起人をお引き受け下さった。

一九五七年、「天平の薨」が発表されていたとき「日中文化交流」誌（五七年七月号）に「遣唐船のこと」と題する一文をお寄せいただいた。そのころから今日まで、井上先生を経糸とした日中文化交流史の思い出は尽きない。

（日本中国文化交流協会 専務理事）

# 吹雪の中に花を握って翳そうか

—井上靖と今官一、弘前での出会い—

米田 省三

昭和二年に早稲田第一高等学院に入学した今官一は、ロシア文学を学ぶかたわら、新感覚派ばりの小説を校友会雑誌に発表していた。昭和五年に一時帰郷した官一は、弘前の祖父の寺である蘭庭院に身を寄せた。在学中プロレタリア映画同盟に参加したり、帰郷後弘前消費者組合を作って活動

していたので、左翼思想の持主として警察からマークされ、弘前劇場でプロレタリア演劇を上演しては警察に追いかけていた。

さて、この頃弘前には白戸郁之助が帰ってきていた。白戸は民衆詩派の詩人井上泰文に師事し、詩誌「詩集」同人として活躍していた。昭和四年

に『日本の胎盤』という優れた詩集を刊行したが、詩壇の反響は意外に冷たく、そのことに絶望した白戸は憤懣やるかたない思いで弘前に帰ってきたのである。その白戸と意気投合した官一は、一緒に雑誌でも作ろうかということになり、発刊のための費用を稼ごうというわけで、レコード・コンサートをやったり、喫茶店で会合を開いて準備を進めていた。メンバーは官一、白戸のほか、三上斎太郎や須藤均治らがあった。そして、その時、白戸と面識のあった井上靖が弘前に来ているということが話題になり、井上も加えようではないかということになったのである。

ところで、どうしてこの時期井上が弘前にいたかというと、当時井上の父は、弘前第八師団の軍医部長として、家族とともに弘前に赴任してきていた。その家族に会うために井上は弘前に来ていたのである。

昭和五年三月に金沢の第四高等学校を卒業した

井上は、九州帝国大学医学部の受験に失敗し、法文学部英文科に入学したが、まもなく登校の興味を失い、大学には行かなくなる。その後の動静については判然としないところもあるが、少なくとも井上靖が、昭和五年の夏と年末に弘前にいたということは確かかなようである。

昭和五年の夏、井上が弘前にいたということは、井上が、来弘した井上泰文と白戸と三人で青森の海で泳いだという書簡を、宮崎建三宛に送っているという（宮崎潤一『若き日の井上靖』）ことから確実と思われる。また、年末に弘前にいたということは、井上、官一の両方に終生忘れられない思い出として、その証言があるので間違いないところであろう。

その井上を仲間に入れて、文学雑誌を作ることになり、「文学abc」の創刊号を発行したのが、昭和五年十二月十日であった。

その当時のことを井上は、「冬の休暇にやって

くると「文学ABC」という思ったより立派なタ  
ブロイド型の同人誌ができていた。今官一氏  
が小説を、白戸郁之助が評論を（\*1）、私が詩  
を（\*2）載せていた。クリスマス之夜、私は二  
人に連れられて町へ出て、当時一番大きいと言わ  
れていたレストランに入り、酒を飲んだ。料理は、  
スープを一皿ずつ頼んで、それに麵麩をつけては  
食べた。あとは何も注文しなかった。誰もろくに  
金はもっていないかったようである。併し、その夜  
のことを、私は若い日の最も楽しかったことの  
一つとして忘れないでいる。戸外には雪が降ってお  
り、ストーブの傍の席を、他の客に譲ることをせ  
ず、その店が閉店になるまで、文学の話ばかり、  
ぶつつづけに、何時間もした。そして、夜更けて、  
誰も通っていない吹雪の道を、どん底の歌を低く  
唱って歩き、街角で、三人は三つの方向に別れた。」  
（「弘前の思い出」と記している。

また官一は「二十四年前——井上靖は、緋の着

物をきていた。外灯にもつれる牡丹雪が背景であ  
った。そのときもらった原稿の中に、忘れられな  
い詩の句が、三行あった。『吹雪の中に、花を握  
ってかざそうか』という一行。そして、『何もわ  
からない明日という日の美しさ。ボロ靴をはいて  
やって来い！』という二行。とるに足りない辺境、  
津軽の、吹雪の夜の出来ごとだったが、——いま、  
昭和二十九年の、文壇という、まれにみる風通し  
の悪い箱馬車の特等席で、わきめもふらずに小説  
を書きつつづけている井上靖が、二十四年前、かす  
りの着物をきて、吹雪の町のメインストリートで、  
そのような詩を書いていたということは——しか  
し、十分に記憶されてよいことであろう。』（『文  
学のふるさと』と記している。

官一の記述によると、この時初めて井上靖と云  
い、詩の原稿を受領したことになっているが、年  
月の経過により記憶も薄れ、こまごまとした点に  
ついての齟齬はあるものの「吹雪の夜の青春」は、

いつまでも鮮烈な思い出として官一の心の中に残っていたのであり、それは井上も同様であった。

この後、井上は昭和七年に京都帝国大学文学部哲学科に入学、翌年「サンデー毎日」の懸賞小説に応募して佳作、官一は警察に追われるように上京、昭和六年に横光利一に師事して本格的に小説を書き始めた。

やがて二人は、「吹雪の中に」「花をかざし」  
てみせることになるのである。

\*1 今官一は、官憲の目をくらすため青木了介のペンネームを使用。

\*2 「文学 a b c」には「しっぽ1」「しっぽ2」「笑う」「死を思ふ日」「或る男」「希望」の六篇の詩が掲載」されている。

(青森県近代文学館 勤務)

死を思ふ日

井上靖

砂丘の上には、おどおどした瘦犬が一匹、  
おちぶれた貴族の様な顔して海を見てゐた。

二月の海には白い波がさむざむと砕けて、  
帆船はまだ生まれてゐなかつた。

俺は煙草をのみながら、  
いつまでも海を見てゐた。

寒潮の底にひらひらと、  
真赤な花が咲いてゐる様に思へたからだ。

原始の昔、地上に咲いてゐた或る花が、  
海底から静かに呼びかけてゐたからだ。

「文學 a b c」より

笑  
う

井上靖

はろばろと拵つてゐた幽霊、

ひたひたと私語いてゐた幽霊、

みんな底知れず崩れ落ちて行つた。

みんな果知れず流れ去つて行つた。

深夜、俺は割れる様に笑つたのだ。

笑つて、笑つて、笑ひこけたのだ。

何もかもに、おさらばした筈の男に、なほ、

明日と言ふ日がぼつかりと肩にかゝつてゐたからだ。

二本の腕ががっちりと体にくっついてゐたからだ。

何もわからない明日と言ふ日の美しさ！

ポロ靴をはいてやつて来い。

血みどろに吠えてやつて来い。

しつぽの様にノホンと舗道に抱かうか、  
断崖にしぶきの様に砕かうか。

憎みきれない奴はいつでもやつつけられるこの手、

底の、底の、どん底まで、

俺にしがみついてゐる二本の手。

吹雪の中に花を握つて翳さうか、

泥濘の中に俺の墓銘をきざもうか。

深夜、俺は割れる様に笑つたのだ。

笑つて、笑つて、笑ひこけたのだ。

何もかもに、おさらばした筈の男に、なほ、

明日と言ふ日がぼつかりと肩にかゝつてゐたからだ。

二本の腕ががっちりと体にくっついてゐたからだ。

「文學 a b c」より

# 夏草冬濤の舞台の中で

澤田 角江

思うどち

遊び惚けぬ

そのかみの

香貫 我入道

みなとまち

夏は夏草

冬は冬濤

井上靖

富士山を北に、駿河湾を南に見下ろし、一帯は

自然公園。その中に竹林をバックに白を基調とした和風の井上文学館があり、門を入るとこの碑がある。

昭和四十八年十月、「あすなる物語」の一節にある愛鷹山、その中腹の静岡県駿東郡長泉町駿河平に、元スルガ銀行頭取の岡野喜一郎氏によって郷土に文化の香りと美しい花を咲かせるためにと井上文学館は建てられた。現在は全国に先生の文学館は建てられているが、ご生前中に最初に建て

られた文学館である。

秋

これより三年前、岡野氏は沼津市に芹沢光治良先生の芹沢文学館も建てられた。芹沢文学館の開館の時、井上先生は「沼津二章」を作詞され（団伊玖磨作曲）、また井上文学館の開館の時、芹沢先生は「駿河なるわが故郷よ」（平井康三郎作曲）を作詞、お互いの文学館を讃えておられる。両先生は旧制沼津中学（現沼津東高校）の先輩後輩の間柄で、詩人の大岡信氏も含めお三人は日本ペンクラブの会長をなさった。岡野氏をはじめ実業界、文化人の多くを輩出している名門校である。

自伝小説「夏草冬濤」は、沼津が舞台である。豊かに流れる狩野川、洪作少年が淡い慕情を寄せた、かみきの娘蘭子の家の近くの御成橋、永代橋、黒瀬橋から眺める四季折々の姿を見せてくれる富士山。沼津の街が一望できる香貫山。

カチリ

石英の音

藤尾こと藤井寿雄氏にこの短い詩を見せられ、詩とはこういうものかと思ったと、後年先生が述べておられる藤尾の家の跡。千本松原には「千個の海のかけらが、千本の松の間に挟まっていた。：：：それを一つずつ食べて育った」碑がある。

若山牧水も愛してやまなかつた松原と海。

先生と作品を愛する読者の集まりによって、文学館創立と同時に友の会が発会され、すでに二十七年の歩みが続いている。各月ごとに発行される友の会の会報は百六十号を越え、読書会も毎月文学館で行われている。

先生は友の会には特に心を寄せてくださり、必ず一年に一度は御来沼くださり講演をもたれ、その後親しく会食パーティで、これから書かれる作品の構想についてお話を下さり、会員にとつてはこの上ない喜びであった。この時は必ず旧制沼津中学時代の同級生、作品の中に登場する金枝

こと金井廣先生、星野重雄先生、故人となられた秋鹿重彦先生、岩崎善助氏等多くの方々の歓談も、お楽しみにされておられた。

先生がお亡くなりになる前年の六月、先生御夫妻を囲む会が下河原の妙覚寺の近くの「菊屋」で行われた。この時は、大きなトランクに「孔子」の資料を一杯詰められ、論語の最古の鄭玄の注釈書の写本を畳の上に広げられ、この写本は、十二歳の少年卜天寿君が筆写したものです、と時間を忘れてお話をなさった。会員の集まりの時は職員は準備から会場の設定などで奔走したが、いつも先生ご夫妻は職員を労ってください、お忙しいスケジュールの中で特別時間を取ってくださいった。お疲れであっても、膝を突き合わせてよもやま話や、次の作品の構想について、時間を忘れてのお話、私達は先生のお疲れを思い、はらはらしたこともあった。

先生の晩年の七年間を様々な機会を通してお目

にかかり、たくさんのお話をお聴きすることができた。そして「人は願っていれば必ず実現しますよ」のお言葉を心の糧としている。

平成三年一月三日。お亡くなりになる数日前、最後の闘病をなさっておられるとき、傳田前館長のお供でお伺いしたとき、奇しくも面談を許され優しい笑顔で迎えて頂いた。その時も「四月の妙覚寺にできる碑の除幕式には必ず行きますから、友の会の方たちには宜しく伝えて下さい」と玄関までお見送りをしてくださいった。夫と死別した時も、ふみ夫人から「死んだ者はどんなに呼び叫んでみても決して戻ってこないのです。しっかりと生きていきなさい」とお励ましを頂いた。

傳田前館長、野田館長、そして多くの方々の厚意の中で、風光明媚の地で仕事のできる日々を感謝している。

(静岡県駿河平・井上文学館 勤務)

# 下北半島『海峡』の文学碑

瀬戸口 宣司

『海峡』は「週間読売」の昭和三十二年十月二十七日号から翌年五月二日号まで二十八回にわたり連載され、その年の九月に角川書店より刊行された。服飾雑誌の編集長とその部下の女性、編集長の友人で、渡り鳥の鳴き声の録音を趣味にしている医師とその妻をめぐる、いわゆる井上先生お得意の恋愛ものである。この小説の特徴をたいへ

んうまくまとめてある巖谷大四氏の解説を引用して紹介すると、この作品の主人公は——実は「人間」ではなく、江戸川河口だったり、渡り鳥だったり、伊豆半島だったり、冬の下北半島だったり、つまり「自然」なのである。登場人物は、自然のなかの点景のようなものである。つまり、人間の内面劇を、自然の風物、とくに渡り鳥に託してい

る。それだけに清潔で美しい作品である——というものである。

『海峡』のタイトルは、冒頭、ナイター観戦中に球場に迷いこんできた「アカエリヒレアシギ」という渡り鳥が下北半島の最北端、大間崎あたりを通り、海峡をシベリヤへ向けて渡っていくのを主人公たちが見にゆく場面が、最後の章に描かれることからきている。

その『海峡』の舞台、青森県下北郡風間浦村下風呂に井上先生の文学碑が建立されたのは平成元年九月三十日のことであった。先生からその建立の話聞いた、福田正夫詩の会「焰」の主宰者・福田美鈴さんに誘われて、私たち詩の会同人もその除幕式に参列しようということになった。参加したのは美鈴さんの夫で詩人の金子秀夫さん、神奈川近代文学館の理事の小澤彰さん、それに加藤不二子さんと私の五人であった。

私は、私が勤める母校の大学の後輩でもある妻の弟が、故郷の青森の十和田市役所に勤めているので、訳を話し、車で下北半島を案内してくれるように頼んだ。井上先生は二日程前に奥様たちと行ってらっしゃるとのことだった。私たちは二十九日の上野駅発の夜行に乗った。朝方早く三沢の駅に着き、迎えにきている義弟の車でひとまず妻の実家で一休みすることになっていた。

義弟のワゴン車に乗って、私たちは下北半島に向かった。野辺地を過ぎて、陸奥湾を左に見ながら車は快適に走った。ここからは私にはもう未知の世界であった。

先生は昭和三十三年の三月に挿絵を描いた福田豊四郎画伯や読売新聞社の担当者とともに、最後の章を書くための取材で下北半島を訪れている。

先生は野辺地を過ぎたところを——列車は波の高い陸奥湾に沿って、雪できびしい表情の夏泊半島を対岸に見ながら進んで行く。半島の風景はし

だいに荒涼たるものになって行く。汽車は長いこと波打際に近いところを走った——（「雪の下北半島紀行」）と描写している。

下風呂は温泉の町であった。海岸に沿った道路より少し下ったところに公園のように整備された場所があり、その一画に先生の文学碑は建てられていた。紅白の幕やテントが張られ除幕式の用意が整っていた。受付に行くと、先生から話がついていたらしく私たちも胸に招待者用のリボンをつけてもらった。式が始まるまえ、テントの中の最前列に奥様と座っている先生が、カメラを向けている私を手招きして呼ばれた。側に行くと「除幕式が終わったら講演をやりませう。これはいつも話していることなので、聞かなくてもいいでしょう。それよりも大間崎のほうを見物していらつしやい。素晴らしいところですよ」と言われた。先生は除幕のあと碑の傍らで、刻まれている「アカエリヒレアシシギ」の詩を朗読された。眼をつむっ

て聞いていると、先生の声は唄うような響きをもつて、すぐそこに広がる海のうえをゆくりと流れていくようであった。私たちは先生の講演をすつぽかして見物に回った。岬からは海峡をこえて函館山や恵山岬がほんとうに近くに見えた。

旅館にもどり、熱い温泉に身をひたした時に、本州の最北端まで来たんだなあという思いが、私にもした。「ああ、湯が滲みて来る。本州の、北の果ての海つばたで、雪降り積もる温泉旅館の浴槽に沈んで、俺はいま硫黄の匂いを嗅いでいる。なぜこんなところへ来たのだ。美しい姫の幻影を洗い流すために、俺はやって来たのだ。」小説の中で、同僚の女性を愛する杉原がもの思いにふける場面だ。

夜、近くの旅館に先生を訪ねた。船越保武氏設計の碑が良かったことや、義弟を慰勞し、色紙を書いて下さるなどして、ビールを飲み、先生は何かつまみもねと仲居さんに頼まれた。「ここでは

ウニがいつぱい出てくるんですよ。もうずっとウニ、ウニ。東京だと高いでしょうね」と先生がおっしゃった。笑いながら聞いていると、先ほどの仲居さんが大皿いっぱい盛った「ウニ」を持ってきた。しばらく間を置いて部屋中に笑いが満ちたのだった。

『海峡』は、この連載がはじまる前に『射程』や『氷壁』『天平の甕』などが書かれ、これら話題作に隠れて、先生の小説にしては目立たないものだが、山本健吉氏が解説するように——渡り鳥が、季節が到来すると、北から南へ渡り、また南から北へ帰るように、彼等にも到着地点がないのである。人生とは、そのようなものであり、何か知らないが、心のうながしによって、繰返し行ったり来たり、動きまわっているべきものなのだろう——という、やはりこれも人間の孤独を描いている井上靖の物語なのである。

昨年一月に湯ヶ島のお墓で営まれた七回忌に参列した。四月に日本大学の曾根博義氏を國學院大學に招き、私が編纂に携わっている雑誌「滴」で傳馬義澄教授と『井上靖をめぐる』という対談を行った。井上先生に國學院大學で「孔子」について講演していただいたのは亡くなる三か月ほど前のことであつた。

(國學院大學勤務 詩誌『焰』同人)

# 「しろばんば」の像が完成

## 井上靖の故郷の小学校に

平成十年一月二十五日（日曜日）、井上靖の母校、静岡県田方郡天城湯ヶ島町、湯ヶ島小学校に、「しろばんばの像」が建られた。

温暖な伊豆半島には珍しく、残雪が多く、気温の低い朝であったにもかかわらず、多くの関係者が出席。印象深い除幕式となった。

像は、町の人々や子供たちの思いを十分に吸い込んで完成したような、暖かみを感じる作品で、町の人々もうれしそうに観賞していた。

湯ヶ島小学校には既に、井上靖の「地球上で一

番清らかな広場。……」で始まる詩碑が建立されている。また、井上靖の岳父で、この町の出身である解剖学者・足立文太郎の記念碑（撰文・井上靖）も建てられている。

### しろばんばの像 設置の概要

モデル 洪作少年とおぬい婆さん

制作・施工者 山田収氏

除幕 平成十年一月二十五日除幕式

### 石碑・碑文

文豪井上靖氏は、自伝的小説『しろばんば』についてこう語っている。

「運よく私の作品で後生に残るものがあるとすれば『しろばんば』です。なぜならこの作品には、私の真実が書いてあるからです。」

『しろばんば』は天城湯ヶ島町が舞台である。

## 「しろばんば」の像に寄せて

制作者 山田 収

「足立文太郎記念基金の一部とPTA活動三年間の募金を合わせて、湯ヶ島小学校に、児童をはじめ皆さんが親しめるものを残そう」という機運が高まりました。

ご存知の通り、湯ヶ島は、文豪井上靖先生の母

校でもありません。学校側との協議の結果、「小説『しろばんば』の世界を表現しよう」という事になり、準備を進めてきました。

私も改めて『しろばんば』を読み直しましたが、冒頭での「しろばんば」を夢中になって追いかけている洪作少年の姿が常に頭の中に浮かび、この形しかないと思えるようになりました。もう一人の主人公とも言えるおぬい婆さんが、洪作少年に呼びかけている姿の空間と、井上先生の『しろばんば』に寄せる興味深い言葉を石碑として、脇に付けた内容が、今回の作品となります。

このブロンズ像を見ることによって、小説を読まれた方には情景が思い出されることで、読まれてない方には、読む事への動機となれば作者として幸いに思います。

(除幕式のパンフレットより転載)

# 第五回・井上靖文化賞

歴史学・考古学・研究者の

## 梅原猛氏に贈る

平成九年十一月二十七日、井上靖文化賞贈賞の最終選考委員会が、東京千代田区の山の上ホテルで開かれ、梅原猛氏に決定した。

今回の贈賞の理由としている。

これまでの贈賞者

第一回 小澤征爾氏（音楽指揮者）

第二回 ドナルド・キーン氏（日本文学研究者）

第三回 陳舜臣氏（作家）

第四回 白土吾夫氏（日中文化交流功労者）と

であり教育者、研究者である。その功績を認め、

日本中国文化交流協会

**井上靖文化賞とは**

文学者井上靖を記念し、日本

文化の向上に資するため、文学・美術・歴史などの分野において、優れた業績をあげた人、または団体に贈る賞である。

日出版文化賞受賞

一九七四年 京都市立芸大学長に就任

同年 『水底の歌―柿本人麿論』で第一回

大佛次郎賞受賞

一九八一年 『梅原猛著作集』（集英社）刊行始

まる

**贈賞** 年一回。賞状および澄川喜一氏制作のブロンズ像のレリーフと、賞金百万円を贈る。

一九八六年 『ヤマトタケル』で大谷竹次郎賞受賞

一九八七年 国際日本文化研究センター初代所長に就任 九十五年、退官、顧問に

一九九一年 日中文化賞受賞

一九九二年 NHK放送文化賞受賞

同年 文化功労賞に

一九九七年 北京大学より名誉教授の称号授与

**梅原猛氏略歴**

一九二五年 三月二十日宮城県仙台市に生まれる

一九四八年 京都大学哲学科卒業

一九六七年 立命館大学教授に就任

一九七二年 京都市立芸大教授に就任

同年 『隠された十字架―法隆寺論』で毎

その他主要作品 『聖徳太子』全四巻、『中世小

説集』など

**選考委員**

(五十音順、敬称略)

大岡信 辻邦生 樋口隆康 平山郁夫

# 『来館者ノート』から

美馬鷹

今、旭川は冬のまつ盛り、連日氷点下二十度前後のしづめが続いたかと思えば、今日は吹雪まじりの雪が舞い散っている。井上靖記念館の建物も雪にすっぽりおおわれ、潇洒なたたずまいとまつ白い雪のコントラストが、旭川の冬を彩っている。

励ましがあり、感動があり、人生の広がりや深まりがある。それは、文豪井上靖や当館へのうれしい便りでもある。

## 広がり・深まり

全国各地から大勢の見学者が訪れる当館では、来館者の感想や意見を記していただく『来館者ノート』を用意してある。そこには、出会いがあり、

私が今、教壇に立つて国語を教えているのも井上靖さんのおかげです。中学時代、『しろばんば』で、井上文学に出会わなければ、今の私はなかったでしょう。この先もず

つと井上 靖さんを心の師とあおいでいき  
いと思います。生徒達にも、よいお土産が  
きました。

(富山県 Y. Mさん)

日本に留学して七年目、初めての一人旅  
をしています。井上さんの作品が韓国語で翻訳  
されていることを知りませんでした。読んで  
みます。

(東京都 M. Hさん 韓国よりの留学生)

井上文学館との出会いによる一人の若き教師の  
誕生は、次代を担う子供達の豊かな人間性をも創  
り上げてくれるであろう。又、世界に広がる井上  
文学の一面をかいま見る思いがした。

### 励まし

井上靖氏を記念するのにふさわしい立派な  
建物に展示内容。館の職員の方々の親切さに  
も感動しました。そこで一句………。

「水曜日井上靖を一人占め」

(札幌市 K・Kさん)

井上さんが旭川出身であることを知らな  
ったので勉強になりました。館内もきれい  
だし、井上さんのことを詳しく展示してある  
で、何も知らない人でも帰る時には、井上  
さんについての知識を得ることができると思  
いました。各地の博物館、美術館をまわって  
いますが、とにかく館内がきれいなことは大  
だと思えます。

こんな記述を見る度に、ここに勤務してい  
るとの喜びを感じる。これからも皆さんに喜ん  
ただける記念館をと、身のひきしまる思いである。

### 親しみ

私の一番好きな作家は井上靖です。初めて  
井上さんの本を読んで感動した小学校五年  
のことを思い出しました。全く偶然に、これか

ら六年間、旭川で過ごすことになりました。

自分が削られていきそうな時、戻ってくる場所を見付けたような気がします。本を沢山読んで豊かな深い人間になりたいです。下地づくりをおこたってしまつては、私がりたような医者になれないのですから……。

(旭川市 K・Aさん)

井上靖が好きで、好きで、好きで、はるばる海を越えて来ました。ここに来るためだけに北海道に来ました。井上靖にふれて、涙が出ました。やっぱり来て良かった！以前湯ヶ島に行った時とは、別の感動がありました。

読みたくても何故か廃刊になっている作品が多くて残念です。私は一番「白い牙」が好きですが、そのことに触れた展示説明がなく残念です。

(福島県 M・Mさん)

根強い井上靖ファンの声。井上靖に親しみを持

ち、井上文学を通して人間性を高めていこうとする思いに感激。はずかしながら、私は「白い牙」を読んでいかなかった。さっそく読んでみてM・Mさんの心境が直に伝わってきた。

### 【出会】

井上靖さんが、旭川出身だとは知らずに、旅先で再会したみたいはこの記念館を見つけた。井上さんと言えば、伊豆の印象が強かったので、原点をみたような気がして何だか頼もしかった。ここは素敵な記念館です。

(東京都 I・Kさん)

地球の裏側ブラジルより、井上靖ファンの弟が訪ねてきた。私自身も初めて訪れましたが、素晴らしい場所で過ごさせていただきました。

井上靖氏と、この機会を作ってくれた三年振りの弟に感謝。

(旭川市 O. Tさん)

井上靖との出会いに感動している姿に、私も感動！これからもすばらしい出会いのかけはしになれる記念館でありたいと思う。

以上、来館者の声に簡単なコメントを添えて紹介してきたが、今後も、旭川市井上靖記念館が北の文化の発信地として皆さんのお役に立ちたいと考えている。

平成十年二月記

(旭川市井上靖記念館 囑託)

関連出版 一

● 『井上靖晩年の詩業―日本現代詩歌文学館を中心に』・日本現代詩歌文学館刊行  
平成九年三月発行。

● 『生き永らえて』・星野重雄著・沼津中学時代の友人達や井上靖の思い出を記している。平成九年十一月発行

● 『滴』第十六号・國學院大學広報部刊行・平成九年七月発行・対談「井上靖をめぐって―日本現代文学研究の課題」・日本大学教授・曾根博義氏と國學院大學教授・傳馬義澄氏。

四十七頁に続く

# 井上隼雄さんの思い出

鈴木之夫

井上のおじさん（井上隼雄 靖の父）が予備役になって、湯ヶ島に帰って来たのは、今から考ええると大層若かったのですね。世間の人は閣下、閣下と言って、遠くから有り難がっていたようです。おじさんも家から出ないで、屋敷のうちにこもっていて、近所づきあいはほとんどおばさんの方でした。

初めから一番近くにいたのは、近い親戚の安藤のおばさん（安藤たね 井上家の隣家）で、井上

のおばさんと毎日行き来していたと思います。いつでしたか、二人で私どもの新しい台所を見に来たことがあります。安藤のおじさんは、床についておりました。安藤のおじさんが亡くなると後を追うように、おばさんも亡くなりました。

湯ヶ島に帰ってきた井上のおじさんの家に初めから出掛けたのは 私の父であったでしょうか。

私の父と井上のおじさんの年は、十歳違いくらいではなかったか。靖さんよりちようど、十歳私

は年下です。

井上のおじさんは囲碁が大好きで、碁を打つ人が来ると、誰でも大歓迎したようです。私の父など丁度いい相手だったのでしょう。ほかに打ちに行く人は希のようでした。

書は上手でしたが、他人に頼まれて書いたということも少ないようです。湯川屋(湯ヶ島の旅館)の看板はその一つでしたが、私は、筆を持って書いているおじさんの姿は見たことはありません。

後のことですが、私の父がガンの末期で臥床中、一度見舞いに来てくれて、医者として脈をみて、何かいい栄養をとらせたいなあ、と言ったことがあります。井上のおじさんが他家に出掛けたのは、この時が一度だけだったでしょう。おばさんは度々見舞いに来てくれました。

葬式の際には、「鈴木のお葬式をしようとは思わなかったよ」と言い、その後突然、「医者を恨むなよ」といつにない強い口調で言われました。父

の病状の診断に問題があったことを言われたのだろうと後で知りました。

井上のおばさんの弟で、井上家本家の長男の欣一さんが、移住していた米国から帰国したのは、欣一さんと一番仲の良かった私の父が、亡くなった後でした。欣一さんは、井上の本家の裏に落ち着けて、小さな家を新しく建てて、年より若く見える奥さんと静かに住みました。「アメリカ」かぶれもしていないお二人でしたが、アメリカ生活の習慣は多少残っておりました。欣一さんの亡くなる前の日だったか、ご夫婦で私の家の前に立ち寄り、じつと土蔵の方を見つめていました。きつと子供の時、父と一緒に遊んでいたことを思い出していたのではないかと想像しました。残されたおばさんは、墓地に墓碑を建て、数年くらい一日も臥床することなくて、家の中で亡くなりました。井上本家の次男の賢二さんは、満州から帰ってきてから、東海自動車というバス会社の専務にな

りましたが、社内の派閥紛争に負けて、湯ヶ島に帰り本家にはいりましたが、清廉潔白の人でしたから、ほとんど無一物で来たようでした。

賢二さんが亡くなった時、井上のおじさんは寝たり起きたりでした。賢二さんはかたいキリスト信者でしたから、三島から牧師さんが来て、湯ヶ島で初めて本式のキリスト教の葬儀をするというので、本家の部屋はいっぱいの喪服のひとで緊張しておりました。その時、井上のおばさんが私の所に来て、おじさんがちよつと言っているからと言いましたので、私は直ぐさまおばさんと一緒に、おじさんの所に行きました。おじさんは床に横になっておりましたが、「自分には出来ないから、君が賢二の葬式をやってくれ」と言われまして、すぐ葬儀場に帰り、先輩が大勢いるけれども、自分がやるしかないなと思い、私が司会をすることにしました。

式が終わってから、牧師さんが、今日の司会は

大変上手にできました。なかなかこうは出来ませんと言われました。早々おばさんと一緒に式が済みましたと報告にいくと、おじさんは喜んで安心しておりました。

何年かして、おじさんが本当に床に就かれてから、ある日家でテレビをみておりましたら、井上靖氏が芸術院会員に内定しました、と出ましたので、早々井上に報告に行きました。おじさんは床の間に上向きに横たわり、おばさんは枕の向こうに座っておりましたから、おじさんの顔は見えませんが、私はおじさんの顔の見える横に座って、靖さんが芸術院会員に内定したというテレビの放映があったことを、報告しました。おじさんは芸術院会員だけはなりたいと言っていたらっしゃるか、大変喜んでおりました。話をしている間に、おじさんは掛布団を手で引き上げて顔を隠しました。私はおやつと思って、アツおじさんも涙を出したんだな、おじさんにも人に見せない涙があっ

たのだな、と心を打たれました。

根っからの軍医一筋で、元は文学のことなど全く気かけなかったろうに、度々行って雑談しているうちに、文芸作品も色々たくさん読むようになっていくようなのに気がつきました。何かの拍子に靖も大変だから、と思いやる言葉もできました。

靖さんの弟の達さんが、芥川賞の候補に名が出たときだったでしょうか。おじさんは、達はまだ駄目です、本を読んだ量が全然違う、と言っていました。私は感心して、子を知るもの親にしくものはなし、と言う言葉があつたな、と思ひだしました。

靖さんの御両親の葬儀は二つとも、湯ヶ島家の広い芝生の上で終えました。二つの式とも私が委員でした。

(湯ヶ島町在住 井上家知人)

### 読書会

「井上靖を読む会」・隔月一回・石川近代文学館内の、井上靖が三年間学んだ旧四高校舎の教室において開催。講師・森井道男氏。

「ナナカマドの会」の読書会・毎週一回・旭川市井上靖記念館内において開かれている。

「芹沢・井上文学館」の友の会の読書会・毎月一回・駿河平・文学館の二階に集まる。

鳥取県日南町「野分の館」・近所の知人が集って、時々開く読書会。

## 平成九年度

### 私の備忘録より

#### 浦城いくよ

平成九年度に私が関わった井上靖関係の行事などについて報告します。今号から年を年度（四月―三月）とし、今回だけは昨年の一月から三月を含めます。

■月十四日 京都の思文閣美術館の学芸員立田まき子さんが、井上靖展の相談のため上京。財団の小山乃り子さんと三人で打ち合わせた。立田さんは昨秋米子へ私を訪ねてこられ、併研究家の堀内

泉甫さんに紹介された。その折、井上靖展をやりたいと希望を述べられた。

■月十八日 沼津の文学館へ。読書会が催した映画「天平の甕」のビデオ鑑賞会に参加。

■月二十一日 第四回井上靖文化賞贈賞式。「白土吾夫氏と日本中国文化交流協会」が受賞した。

山の上ホテルで贈賞式と祝賀会が開かれ出席。

日中間に正式の国交がない一九五六年に協会は創立され、文化交流を推進してこられた。私の遠い記憶の中でも井上家に多くの中国の文化人が来られた。一九六一年の巴金や林林、それから謝冰心、嚴文井、楚図南他の諸先生たち。一九六五年には老舎も来宅された。その後老舎は文化大革命の時牢屋で獄死。国交がない時代は来宅されている間中、警察が家の周囲をくるくるとパトロールしていたのを思い出す。国交が正常化してからは周揚夫妻や常書鴻夫妻、夏衍、王炳南ら次々と多くの中国人の要人たちが来宅された。父は日中文

化交流には一生懸命だった。

二月二十六日 父の命日の催しが例年通り伊豆の天城湯ヶ島町で行われた。当年は七回忌に当たる。

午前中のお墓参りには、冬晴れだが風の強い日であつたにもかかわらず、五十名余りの方が参列された。午後からは昨年新築された天城会館で、第六回の井上靖作品読書感想文コンクール（応募一四一四篇）の表彰式が行われた。つづいて井上靖全集の編集をしておられる曾根博義氏の「井上靖全集雑話」と題する講演があつた。もつともつと多くの方に聞いていただきたい素晴らしい講演だった。前夜には宿の白壁荘で、沼津の友の会の方々との七回忌の追悼の集いが催され、修一、佳子、主人と私も参加した。

三月七日 父が四代目の会長をしていた日本柔道育英会主催の、父の「七回忌」と歴代の会長たちの「昔語りの集い」が三越迎賓館で開かれた。母は風邪のため欠席。修一、佳子、私が出席。

三月十一日 旭川井上靖記念館の相談役会がクラブ関東で開かれた。後藤典享旭川市教育長、古田辰男館長、高野昭氏、清水節男氏と私が出席。記念館が抱えている問題や、こちらからの希望などを話し合う。

三月十四日 財団誌「伝書鳩」の原稿「私の備忘録より」を書き上げる。

三月十八日 米子の友の会誌の原稿「鑑真和上と父」を書き上げる。

三月二十二日 滋賀県高月町立図書館の井上靖記念室で「井上靖の撮ったイラン一九七三」の写真展が催されている。米子の井上靖記念館の学芸員、中原圭子さんと佐伯憲昭氏と同行する。フィルム保存状態が悪いため暗いものもあつたが、父の撮った写真展が昨年引き続き開かれた。

四月二日 九月二十七日から井上靖展が開かれる京都の思文閣美術館を訪問。手入れ中の会場を案内されながら打ち合わせをする。

四月十九日(二十)日 米子「アジア博物館・井

上靖記念館」へ。二十日、アナビアン・コレクションをご覧になるため三笠宮ご夫妻が来館された。井上館に来られた折、雑誌「絨毯とタピストリー」にご夫妻の長女近衛甯子さまが平山郁夫氏と父の三人で座談会をしておられるのを思い出し、ご覧に入れた。とても喜ばれて最後までお二人で楽しそうにお読みになられた。宮様は父のことをよくご存じで、カメラマンが私を入れて三人を撮ろうとした時、「ちよつと待つて。お父様を入れて撮りましょう」と言われ、父の写真の前まで移動されるお心遣いを示された。昼食を一緒にした折、井上靖記念文化財団についてお尋ねになったのでご説明申し上げた。

四月二十五日 芹沢光治良展―生誕一〇〇年記念

―の開催記念レセプションが夕方世田谷文学館で開かれ出席。芹沢先生も沼津のご出身で、建物は各々異なるが「芹沢・井上文学館」として運営さ

れ、友の会の組織も一緒になっている。書齋が再現され、「人間の運命」「巴里に死す」などの原稿、書簡、愛用の品々、資料など約三百点が展示されていた。佐伯彰一館長に久しぶりにお目にかかる。財団よりお花を贈呈する。

五月四日 芹沢先生の誕生日。世田谷文学館で「ト

ークとコンサート」が開かれ、沼津の友の会事務局の沢田角江さんたちと出席した。芹沢文子さん(三女)と関玲子さん(四女)がお父上のこと、留学時代のエピソードなど語られ、つづいてピアノと先生のお好きだったアベマリアなどを、父上を偲んで披露された。ホールから見える夕方の庭の新芽がさわやかで、とても気持のよい催しであった。

五月十一日 米子井上靖記念館の学芸員中原圭子

さんの結婚披露宴に出席。スピーチを頼まれる。

五月十六日 芹沢井上文学館友の会の会員二十六

名が芹沢展を見学後井上へ来宅。季節の柏餅でお

もてなし。父の思い出を話されたり、質問に答えたり、母の自慢の畑を見ていただいたりで二時間余りはまたたく間に過ぎた。

**五月二十六日** 井上家にて井上靖展の打ち合わせ。京都時代を中心に芥川賞受賞までとすることに決まった。翌日曾根博義氏に監修と講演を電話でお願ひする。

**六月三日、四日** 米子の井上靖友の会の文学散歩に同行する。バスで井上館前を出発し、錦帯橋、中原中也記念館を見て湯田温泉泊。翌日津和野、森鷗外記念館他を見学。

**六月十六日** 井上靖展の打ち合わせ及び写真撮り。立田さんと大津さんがカメラマンを連れて井上宅に。曾根先生も来られ、資料、本、写真、品物などを選ぶのに、午後一時半より夜の九時近くまでかかり大変な作業だった。

**七月十一日、十四日** 沼津の井上靖友の会の読書会のメンバー五人を旭川の井上靖記念館にお連れ

し、秋岡康晴先生を講師として開かれている読書会に参加した。旭川側は二十二名。『夏草冬濤』にてくる沼津に興味を持たれ、質問に沼津側が答えるなど、有意義な読書交流会であった。翌朝の朝日新聞や北海道新聞など多くの新聞で報道され、私の思いつきで開かれた交流会が、これほど反響があるとは思ひもなかった。十四日には写真家の大塚清吾氏の講演会が井上館のラウンジで催された。父の偲ぶ会でお願ひしたのが実現した。父と一緒にシルクロードへ旅をされた時の話を中心に、父への思いをエピソードを交えながら温かく話された。

**七月十七日** 中国出版代表団歓迎パーティが東京会館で開かれ、修一と出席。

**八月一日** フランス国営テレビが世界の二十六人の作家の一人として井上靖を取り上げ、その取材のため約一ヶ月日本に滞在。取材のアドバイスや関係者の紹介などをした。

**八月二十日** 米子の友の会誌に「海鳴り」という名前がつけられた。どこへ行っても日本海がすぐ見える場所にふさわしい名前だ。原稿「三笠宮と父と絨毯」を書き上げる。

**九月五、六日** 米子井上靖記念館へ。来月の友の会三周年記念行事と「海鳴り」の打ち合わせ。

**九月七日** 吉川英治忌。ご案内をいただき主人と伺った。青梅にある吉川記念館が開館二十周年を迎え、記念行事として「川柳家吉川雉子展」が開かれており、吉川英治のもうひとつの才能をみることができた。「新平家物語」の挿絵なども展示され、杉本憲吉画伯にお目にかかった。数々の名作を執筆された母屋も開放されており、多くの吉川ファンが全国から集まっていた。お天気もよく、山を背にしたお庭が青々と美しく、気持ちのよい半日を過ごした。奥様もお元氣だった。

**九月十七日** 「井上靖展」への品物出し。立田さん、大津さん、美術運搬車の方々来宅。

**九月二十七日** 「井上靖と京都―美と知の出会い」展が思文閣美術館でいよいよオープンした。会期は十一月三日まで。主人と出かける。地味ではあるがしつかりしたよい展示。気づいた小さな間違いを何点か直す。京都大学のすぐ近くにあり、父兄とご縁のあった方々が多数来られると聞く。

**九月二十九日** 東京会館での遠藤周作一周忌に母のお供で同行。

**十月三日、五日** 米子井上靖記念館へ。友の会三周年記念行事。午前中、理事会、総会、講演会がある。記念館の大きな庭でガーデンパーティーが開かれた。

**十月十一日** 京都思文閣美術館で母井上ふみのトークと曾根先生の講演会が開かれた。京都時代の知り合いの方々が多数来て下さった。

**十月十四日** 日中文化交流協会二十五周年祝賀パーティーがホテルオークラで開かれ、佳子と出席。

**十月十八日** 芦屋市の谷崎潤一郎記念館で十二月

七日まで「阪神間モダニズム展」が開かれ、「猟銃」の原稿を出品。

十一月十日 「井上靖と京都」展の展示品が帰ってくる。

十一月十一日 東京会館での中国作家代表団歓迎パーティに母と出席。

十一月二十九日 母の米寿の祝い。御殿山の「なだ万」にて四人の子供夫婦、孫、曾孫で祝う。

十二月五日 井上靖研究家の藤沢全氏が沼津文化センターで「狩野川と井上靖」と題して二時間の講演。野田館長と沢田さんと伺った。小説には川が沢山出てくるが狩野川を原点として他の川を見ていることなど分かりやすい講演だった。

平成十年一月二十三日 第五回井上靖文化賞贈賞式。梅原猛氏が受賞。山の上ホテルで贈賞式と祝賀会が開かれ出席。雪の降る寒い日だった。梅原先生は父の「しろばんば」などの少年時代の物語と「孔子」が好きと言われ、これから釈迦について

書いてみたいと語られた。

一月二十五日 例年の天城湯ヶ島町での命日の行事。本年は午前中湯ヶ島小学校において「しろばんばの像」の除幕式があった。午後からは町民劇団による「しろばんば」の初公演があり、町民の大熱演を楽しんだ。お墓参りは前々日に降った雪のため熊野山に登ることができず井上家跡の「しろばんばの碑」の前で式が行われた。鈴なりの夏みかんや紅梅が雪に映えて一段と美しかった。

三月五日 「ペルシャ錦」の出版記念会が日本工業倶楽部で三笠宮ご夫妻をお迎えして開かれた。

母と出席。「アジア博物館・井上靖記念館」に収めてあるペルシャ錦の世界三大コレクションの一つであるアナビアン・コレクションの豪華な写真集。まず開くと父の詩「ペルセポリス」が目を惹く。

(井上靖長女・井上靖記念文化財団評議員)

## 詩と小説の間

森井道男

井上靖は、もうずいぶん前のことになるが、私の質問に答えて、こう言った。

——小説は人の心を描くものですが、詩は樹の心、風の心、水の心も描くものだと思います。私は小説も詩も書きますが、詩を書いているときの私は、完全に小説家ではなくなっています。——

若いころは詩人であり、やがて小説形式を自己表現の手段としていった文人は、島崎藤村、伊藤整のように珍しくはない。しかし、小説家として

一本立ちしたあとでも、並行して詩を作ることを止めなかつた人もいる。靖もその一人である。

詩は、樹の心、風の心、水の心も描くもの——私はそういうものに思いを寄せたことがあるだろうか。地球にやさしく、とか、自然の資源を大切に、とかいう標語を、目にしたり耳にしたりする事は多いが、靖はそんなことを言ったのではないだろう。

—— 遠い少年の日よ。風の中に散る白い冬の陽

のきらめきよ。今にして思うと、私の揚げていたものは、凧ではなくて「孤独」だったのだ。いや「孤独」ではなくて「死」であったのだ。私は烈風の中に「死」を揚げていたのだ。そして、田圃の稲の切り株の上を駆けては無慚に突き刺さっている「死」を拾っていたのだ。

これは私が、靖から「風の心」の話聞いたころに、ある雑誌に発表された「凧」という詩の後半である。冬の湯ヶ島で、子供たちが凧を揚げる。だんだん畑の烈しい風の中で、くるくる廻りながら揚がって行く凧のうちで、なぜか靖少年の凧だけが、真逆さまに落ちて来ては、田圃の黒い土の霜柱の中に突き刺さる。

ここにも「風」は現れるが、描かれているのは「人の心」であって、「風の心」ではない。靖という人の感性がとらえた「孤独」と「死」が、凧の動きの中に象徴されているのである。

私はこの詩を読んだとき、揚がらぬ凧が「死」の姿をしている、という表現が、もうひとつ、よく判らなかつた。しかし、それから十年ほどの歳月を置いて、「本覚坊遺文」が書かれ、——「無」ではなくならん。「死」ではなくなる！という重い主題が繰り返し点綴されるのを読んで、漸く、暁闇の立ちこめている空に動くもののあることに気づいた。

——「死」ではなくなる！

「死」によつてしかなくすことのできないものは、一体、何であろう。詩「凧」の中に揺れ動くものと、小説「本覚坊遺文」の妙喜庵の席で、閃くように片鱗を見せるもの。十年の歳月を間に置いて、靖は同じ一つのものと対座している。枯れかじけて寒い連歌の極みの境地に、茶の湯の果てを重ねたのは、紹鴎「かも知れないが、それを甦らせ、現代の小説の中に生かしたのは靖である。同じように、利休直筆とされる手紙の書面に、

「侘数寄常住、茶の湯肝要」の十文字を見出し、これを茶ちやの湯者ゆものの心構えとして、作中に重要な位置をあたえたのも、靖である。

その靖が十年の歳月を通して見ようとしていた主題は——と考えを凝らしていくと、幽ゆうかに見えて来るものがある気がするが、作中の言葉を借りて言えば、それはまだ、私には重すぎる問いであり、当分はこの問いに苦しめられることになるうかと思う。

それにしても、と私は考える。樹の心、風の心、水の心、を靖は詩にしたことがあるのだろうか。

靖は本質的には詩人であり、詩的直観で対象をひとつかみにする感性を、豊かに持った人であるとは思いますが、また一方では、第一詩集「北国」(昭和三十三年)のあとがきに記された靖自身の自作に対する解説もまた、謙遜という面を割り引いても、一面の正確さをもっていると思われる。

——私にとっては、これらの文章は、詩というよ

り、非常に便利調法な詩の保存器であり、多少面倒臭い操作を施した詩の覚え書きである。「中略」何らかの呪術をかければ、それぞれそこから一つの詩が生まれるといった態のものである。

だとすれば靖は、樹の心、風の心、水の心、を直接に描いたことはおそらく無く、何らかの呪術をかければ、「そういうものが生まれるかも知れませんよ」と言ったのかもしれない。今年(平成十年一月)湯ヶ島小学校の校庭に設けられた「しるばんばの像」の除幕式にのぞみ、空は青く晴れ渡っているのに、空気の肌を刺すような冷たさに肩をすくめながら、私はそう考えた。

(日本ペンクラブ会員)

第六回 静岡県天城湯ヶ島町主催

井上靖作品読書感想文コンクール

平成九年度入選作品 高校生の部

「最優秀賞」受賞作品

「敦

煌」

静岡県立浜松北高等学校一年

中野 かほり

私は、この本を読んで、敦煌やそこに暮らす人々を目のあたりにしたと思います。この物語のありとあらゆる場面が、現実味をもって生々しく目の前に浮かんできました。主人公の趙行徳、朱王礼將軍、王族の末裔尉遲光、又、名もなき登場人物

達の体を通して、悠久の大地を、ギラギラとした生命力にあふれた人々を、激動する敦煌の歴史を目で見、肌で感じる事ができたような気がしてならないのです。

この物語の中には、さまざまな思いをもった人

物が現れ、やがて消えてゆきます。ひよんな事から軍人として生きることになり、戦いに、また、西夏文字の翻訳、敦煌の仏典の保護に力を注いだ趙行徳。西夏をより強大に創り上げていく李元昊。愛した人の敵を討つため、主君へ反旗を翻す朱王礼。乱暴で身勝手だが、王族の末裔という誇りと剛気さをもつ尉遲光。趙行徳に貞操をたてて死んだ回鶻族の王女。仏典を守るために働いた三人の若僧達。その他にも多くの人々が登場しますが、その誰もが、自分の選択した道を一心不乱につき進んでゆきます。そんな彼らの姿に、私は心を通き動かされました。その選択肢が結果的に正解といえなかったとしても、己の信念を貫こうとする彼らの行動は、なんと魅力的なことでしょうか。そこには、自分に対する誇りが感じられました。

彼らのなかで、私が最も強く心を引き付けられたのは、開封の市場で売られていた、名もない西夏人の女性です。彼女は、この物語の中では決して

目立った存在ではありません。しかし、私には、この女性がこの物語の根底にある大切なものを持っているように感じられました。彼女との、たった一度の出会いによって趙行徳は、それまでの人生とは一変した、新たな道を歩んでゆくことになるのです。それだけ彼女は趙行徳に、そして私たち読者にも鮮烈な印象を与えます。

大勢の群衆の中、裸にされ、身を切り売りされそうになるという屈辱を味わわされても、彼女は微動だにしません。その強さ、烈しさはいつたどこから来ているのでしょうか。私はここに、この女性の美しさ、民族の誇りというものを感じました。そしてそれが、否応なしに未だ見ぬ中国の西域、西夏それに敦煌への興味をかきたてます。

「西夏の女を見損なってもらっては困る。」  
彼女のそんな台詞が心に残りました。

この「強さ」や「誇り」は、言いかえてみれば自尊心、つまり自己の強さにも繋がるのでしょうか

が、この物語、この時代にはあちこちで見受けることができたこれらの気風も、今では世の中にも、自分の中にも見つけにくくなってしまいました。

確かに、これらは有り過ぎれば決して誉められるものではありません。しかし、この物語で私を一番感動させたのは、そんな人々の「強さ」でした。それが、この物語の根底に流れているように私は思うのです。強い思いを持ち、「生きた」人々がいたから、私は今まで見たことのない敦煌の「色」を見ることができたのでしょうか。

私の空想の中で、敦煌はいつも同じ表情を、同じ色をしていました。人間達が泣いても笑っても、支配者がどう移り変わっても。そうして、趙行徳や三人の僧から預かった仏典を懐に抱き、再びそれらが日の目を見るまで、淡々と守り続けていきました。そんな大きな自然の前、人間は何んと小さなものでしょう。この物語の後、趙行徳達の後、きつとこの敦煌で、数多くのドラマを繰り広

げたことでしょうか。それでも敦煌は、表情一つ変えずに今日も佇んでいるのです。人々の熱い「動」の姿と共に、それと対照的な敦煌の「静」の姿にも、何か物悲しい、静かな感動を味わうことができました。

敦煌の仏典は時代を超え、二十世紀の今日発見され、研究されています。趙行徳ら——実際は誰の行動か分かりませんが——彼らのうち誰か一人でも欠ければ、敦煌の仏典が守られる事はなかったでしょう。歴史の前、人間の力は小さなものです。どんなに強勢を誇っても、一炊の夢と消えてしまいます。ましてや人一人の力などどれほどのものでしょうか。しかし、その一人一人の人間の力が何かを起こす事は確かです。

「敦煌」とは違い、私達の周辺は日々目まぐるしく動いてゆきます。けれど私は、この物語に登場する彼らのように、強く、誇りをもって生きられたら、と心から願っています。

# 井上靖記念文化財団

## 平成九年度 事業報告

井上 修一

平成九年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 第五回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました。贈賞対象を、数次にわたる選考で四氏に絞りました。選考委員の先生がたによる最終選

考が十一月二十七日に山の上ホテルで行われました。その結果、「梅原猛」氏に贈賞が決まり、直ちに報道、出版関係各社に通知されました。

また平成十年一月二十三日には、百五十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

なお、選考委員の先生がたは大岡信、辻邦生、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。

(二) 井上靖講演会

平成九年五月六日、調布市「たづくり会館」にて行われた「井上靖講演会」に講師を派遣いたしました。

(三) 井上靖展

平成九年九月二十七日から十一月三日まで、京都市左京区田中関田町の「思文閣美術館」にて、「井上靖と京都——美と知の出会い」展が本財団と思文閣美術館の主催、京都府ならびに京都市の後援で行われました。この文学展には期間中にトークと講演もあり、それぞれに講師を派遣いたしました。

(四) 井上靖の墓参りと井上靖作品読書感想文コンクール

平成十年一月二十五日に静岡県天城湯ヶ島町ならびに静岡県駿東郡駿河平の井上文学館主催、本

財団主催の墓参会「翌檜忌」（あすなるき）が積雪のため熊野山の墓に登ることができず、井上靖旧邸跡の「しろばんばの碑」前にて行われました。

また同日天城湯ヶ島町「湯の国会館」にて天城湯ヶ島町主催、本財団共催の「追悼・井上靖」の行事が行われました。これに引き続いて、同町主催、本財団協力で第六回「井上靖作品感想文コンクール」入選者表彰がありました。

表彰式の後、天城会館内「天城劇場」にて同町ならびに同町の「文学のふるさと実行委員会」の主催で天城湯ヶ島町民劇団による「しろばんば」の劇が上演され好評を得ました。

なお、直接本財団が関係したものではありませんが、当日二十五日の午前、湯ヶ島小学校校庭にて、「しろばんば」の記念像（山田収氏作品）が建立し、除幕式が行われました。

(五) 平成九年度の本財団理事、評議員は次の方

々です。(五十音順)

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 大岡信 相賀徹夫 上林吾郎 小

西甚右衛門 佐藤亮一 高碓芳郎

徳間康快 野間佐和子 平山郁夫

横地治男

監事 三木啓史

評議員 井上卓也 浦城幾世 大越幸夫 大

波加弘 尾崎秀樹 角川歴彦 嶋中

雅子 黒田佳子 高野昭 高原須美

子 緑川亨

(井上靖記念文化財団 常務理事)

二十八頁に続く

関連出版 二

●『文壇放浪』・水上勉著・毎日新聞社刊行・

平成九年九月発行

●「歴史小説の世紀」・「新潮」五月臨時増刊

号対談―歴史小説から日本人が見える―

●『文学館探索』・榊原浩著・新潮選書・新潮

社刊行・平成九年九月発行

●『文学者における人間の研究』・中島和夫著

―二つの歴史小説―・武蔵野書房刊行

●『戦後文壇覚え書』・杉森久英著・河出書房

新社・井上靖の作家出発期頃の文壇の様

子が書かれている。平成十年一月発行

## 鳩のお知らせ

★平成九年二月・井上靖の自伝的小説『北の海』

の、おおらかな浪人生「大天井」のモデルであつた小坂光之介氏が逝去。九十一歳。名古屋大学柔道部の現役師範で、葬儀には多くの教え子が参列し、名大の学生が弔辞を読んだ。

★平成九年七月十四日・旭川市井上靖記念館で、

写真家の大塚清吾氏による『井上靖と私』の講演がおこなわれた。

★平成九年九月～十一月・京都市思文閣美術館で

「井上靖展」が開催された。

★平成十年十月九日・旭川パレスホテルで旭川市

井上靖記念館が開館五周年記念事業として講演会を開催。講師は作家の椎名誠氏。演題は「『凍った大陸・砂の海』～井上靖文学の舞台を歩いてきて～」。

★平成九年十一月二十七日・井上靖文化賞の贈賞

は歴史家の梅原猛氏に決定した。

★平成九年十一月・『日本海詩人』などで若き井

上靖と交際のあつた詩人井上康文の『生誕百年展』が小田原文学館で開催された。

★平成十年一月二十三日・梅原猛氏の井上靖文化

賞受賞祝賀会が山の上ホテルで開催された。

★平成十年一月二十五日・静岡県天城湯ヶ島町湯

ヶ島小学校にて、「しろばんばの像」の除幕式がおこなわれた。

☆平成十年一月二十五日・伊豆文学フェスティバルの行事の一環として、天城湯ヶ島町民劇団が天城会館内天城劇場ホールで「しろばんば」の劇を上演。

★平成十年一月・青森県近代文学館で「今官一著作展」が開催された。今官一と井上靖は、詩誌『文学abc』での同人仲間であった。井上靖エッセイに「今官一」がある。

★ご寄贈有り難うございます。

北上市・日本現代詩歌文学館より

「日本詩歌文学館」

鈴鹿市・大黒屋光太夫顕彰会より

「光太夫だより」

静岡県広報課より

「ふじのくに」・(関連文掲載)

清水市・高橋絹代様より

「くれっしえんど」(しろばんばと赤い実の洋燈)

青森県近代文学館より・パンフレット・他

「葛西義藏没後七十年特別展」

「高木恭造没後十年床別展」

「北の夜明け―青森県の近代文学―明治期」

松本市・旧制高等学校記念館より

「記念館だより」

駒場・日本近代文学館より

「日本近代文学館」

沼津市・芹沢・井上文学館友の会より

「芹沢・井上文学館友の会会報」

旭川市・井上靖ナカマドの会より

「赤い実の洋燈」

# 井上靖の 国内旅行一覽表

大正一〜二年頃

静岡・五、六歳の頃に時々祖母に連れられて湯ヶ島から両親の住む静岡市に行く。

一九一四(大正三)年

七歳

夏

豊橋・祖母につれられ湯ヶ島から両親の住む豊橋に会いに行く。

一九一八(大正七)年

十一歳

夏

伊豆・西海岸の重村と言う部落で友達の親戚に厄介になる。

一九二三(大正十二)年

十六歳

夏〜八月三十一日

台北・妹静子と両親の住む台北へ行き関東大震災前日に帰る。父の台湾赴任期間中

(大正十一年三月〜十五年八月)には台北に二、三回行っている。

大正十三〜十四年頃 静岡・沼津より静岡高校へ柔道の試合のために、二度行っている。

一九二五(大正十四)年 十八歳

三月 山形・山形高校に受験のため、知人の縁で個人宅に数日宿泊している。

一九二六(昭和一)年 十九歳

受験の頃 静岡・山形高校受験の翌年、静岡高校受験のため先輩宅に十日ほど泊まる。

三月〜八月頃 台北・中学卒業後、浪人中、両親と暮らすために台北へ行く。

一九二七(昭和二)年 二十歳

夏 湯ヶ島・高校一年生の時、友人を伴って湯ヶ島に遊びに行く。

一九二八(昭和三)年 二十一歳

一月〜四月 静岡・静岡三十四連隊に入隊。肋骨を折っていたために直ぐに除隊。

七月十七〜十八日 京都・柔道インターハイで松山高校と対戦のために行く。試合場所は京都大学武徳殿。

十四 金沢発 京都 十五 京都開会式 十六 試合開始 十八 靖出場

七月十九日 大津・滋賀県立大津商業柔道部の合宿にコーチとして出かける。

一九二九(昭和四)年 二十二歳

二月頃 富山・高岡市石動の大村正次宅を訪問。

昭和三年〜五年頃 青森・父弘前赴任中の夏や冬に、青森で遊び陸奥湾で泳いだり弘前の詩人とも知り合う。

一九三〇(昭和五)年 二十三歳

十二月頃 弘前・正月を家族と過ごすため弘前に行く。

一九三一(昭和六)年 二十四歳

春 弘前・父退官のころ家族で弘前の町を歩いている。

九月 静岡・静岡三十四連隊に入隊。間もなく除隊。

一九三五(昭和十)年 二十八歳

十月〜十一月頃 東京・「明治の月」上演期間中に新橋演舞場に行っている。

一九三六(昭和十一)年 二十九歳

二月二十六日 東京・池袋の宿でシナリオを書きあげ翌朝二二六事件を知る。

八月十四日 東京・千葉亀雄賞受賞式のため上京、東京の毎日日本社で賞状を受ける。

冬 四国・徳島海部郡阿部村に毎日新聞大阪本社入社後初めて出張。

一九三七(昭和十二)年 三十歳

九月 湯ヶ島・入隊の召集出発前夜に行く。

九月〜一月 名古屋・名古屋野砲第三連隊入隊。中国各地に駐屯。四カ月で内地送還。

昭和十四年頃五月 高野山・「堅精論議」の記事取材のため、初めて高野山に出かける。

昭和十四〜十五年頃 奈良・室生寺に行っているとの記述がある。

一九四〇(昭和十五)年 三十三歳

九月 奈良・法隆寺壁画模写開始日に法隆寺に模写の画家を訪ねている。

秋 奈良・法隆寺壁画模写開始日の一、二カ月後、荒井寛方の住む「阿弥陀院」を訪問。

暮 長浜・愛知の旅五、六日目に続き宇和島泊り〜翌日長浜櫛生村瑞龍寺十一面観音見る。

一九四一(昭和十六)年 三十四歳

四月 奈良・法隆寺金堂を訪れ、中川善教師と共に、荒井寛方の模写を見ている。

昭和十七〜十八年頃 紀州・木本の友人宅を訪問。

昭和十八〜十九年頃春 奈良・法隆寺に取材に行き、模写中の入江波光を見る。

一九四四(昭和十九)年 三十七歳

六月 奈良・法隆寺を訪れている。模写画家の姿はなく金堂は閉められていた。

一九四五(昭和二十)年 三十八歳

五月十九日 鳥取・中国山脈の農村に疎開の下見に行く。

六月十八日(十六日?) 鳥取・鳥取県日野郡上石見福栄村に家族を疎開させるため荷物運びに行く。

七月二十一〜二十二日 赤穂・広瀬蔵相の塩田視察の記事取材に行く。

八月十四日 京都・終戦記事用の準備のため、午後妙心寺にG禅師を訪ね取材する。

十一月二十六日〜九日 鳥取・家族の疎開引き上げ準備に行き暫く逗留。十二月九日上岩見発、岡山

一九四六(昭和二十一年) 三十九歳

終戦直後七月初旬 富山・高岡市で七夕を見る。(富岡の七夕 七月一日〜七日)

秋 石川・小松市に、橋本関雪の長男節哉と関雪の作品を見に行く。

一九四七(昭和二十二)年 四十歳

春 瀬戸内・岡山県と兵庫県下の町々を、橋本節哉と関雪初期作品を見に行く。

三月 奈良・初めて東大寺のお水取りを見る。

夏

奈良・法隆寺に壁画模写事業打ち切りの関連記事取材に行く。

一九四八(昭和二十三)年 四十一歳

三月三日

高野山・金剛峰寺で将棋の升田幸三対大山康晴の名人位戦の取材に行く。

一九五〇(昭和二十五)年 四十三歳

八月

湯ヶ島・橋本関雪の伝記を書くつもりで一カ月程滞在する。

昭和二十五〜二十六年

大阪・安閑天皇の玉碗発見に関して取材に。(二十五年十月半〜二十六年八月以前に)

一九五一(昭和二十六)年 四十四歳

春

高野山・「澄賢坊覚書」(二十六年六月「文学界」発表)取材のため親王院に泊る。

八月

湯ヶ島・関雪の伝記を書くつもりで一カ月滞在する。

？月

関西・大阪琵琶湖丹波地方をしばしば旅行。

？月

川奈・河盛好蔵 横山隆一 吉川英治 宮田重雄 石川達三

一九五二(昭和二十七)年 四十五歳

四月

三崎・三浦半島に行く。

四月

箱根・外輪山の金時山に登っている。

四月

大仁・大仁ホテルに泊まる。

六月

中部地方・文芸春秋新社の講演旅行に初参加。  
● 吉屋信子 丹羽文雄 源氏鶏太

亀井勝一郎 近藤日出造 深田久弥 ● 松本 長野 富山 金沢

七月又は、八月

日光・中禅寺に二、三泊の家族旅行。

八月

伊豆・修善寺より天城峠を越え伊豆半島縦断、石廊崎へ行く。

九月

榛名湖・周辺を歩く。

十二月三十一日〜元日

北九州・大阪天保山発〜別府航路で大晦日 初日の出を松山港でむかえる。

**旅先**・大阪〜博多〜別府着 大分〜由布院〜福岡へ 博多箱崎神宮参拝

昭和二十七〜二十八年頃奈良・婦人雑誌の記者と共にお水取りに行っていたとの記述がある。

一九五三(昭和二十八)年 四十六歳

一月下旬、二月頃

長篠一帯・「風と雲と砦」の取材。**旅先**・東京〜豊橋泊 豊橋〜野田城址〜長篠城址

二月

佐渡・「別冊文芸春秋」の取材旅行。佐渡に三泊。**旅先**・福田恆存 田川博一

二月か三月上旬頃

信州・「風と雲と砦」の取材で武田信玄の居城を見る。

**旅先**・甲府〜韮崎〜諏訪湖〜天龍川流出口〜伊那鉄道〜天龍泊〜汽車〜伊那へ

三月末

五浦・「芸術新潮」の仕事で茨城県五浦へ。故岡倉天心宅訪問のため。

春四月以前

上田〜宇治・木曾 上田 和田峠

四月

関西・京都と大阪 三泊の講演旅行。

四月

箱根・箱根二泊

五月二十八〜六月五日

九州・文芸春秋新社の講演旅行。**講師**・河盛好蔵 丹羽文雄 山野佐世男 源氏鶏太

**旅先**・羽田発〜福岡二泊〜新入〜佐世保〜雲仙〜大牟田〜水俣〜熊本〜羽田着

七月

関西・金堂消失後初めて法隆寺を訪問。**旅先**・大阪 京都 岐阜 彦根

九月

茨城・水戸市大洗海岸に行っている。

十月

郡山・「婦人生活」の講演旅行。講師・田村泰治郎 永井龍男 横山隆一 三宅艶子

十一月月上旬

瀬戸内地方・文芸春秋新社の講演旅行。講師・源氏鶏太 清水昆 池島信平 桶谷繁男

十二月三十日〓元日

九州・「週間朝日」講演。「明日来る人」取材。旅先・三十一〓長崎〓三角 元日〓熊本

九五四(昭和二十九)年 四十七歳

一月六、七日頃

高崎・新潮社の関係。高崎ダルマ市へ。同行・丸山泰治 カメラ田村武能

二月

中部地方・「あした来る人」取材。旅先・静岡〓山梨 東海道〓富士川〓甲府

二月末

愛知・浜名湖、渥美半島、蒲郡をまわる。

三月

信濃・旅先・川中島 海野平 上田平原 高崎

五月

中部地方・旅先・松本(崖崩れで予定変更 六月にやり直す)〓木曾〓名古屋

六月中旬

上高地・「あした来る人」取材に行く。五月の中部地方の旅行のやり直し。

六月二十五〓二十九日

北陸地方・「週間朝日」の講演旅行。講師・荒垣秀雄 坂西志保

七月八日〓十三日

旅先・東京発夜行 二十六〓高山 二十七〓金沢 二十八〓福井 二十九〓帰宅  
北海道・文芸春秋社講演。講師・清水昆 今日出海 河盛好藏 田村泰次郎 那須良輔

九月頃、

旅先・苫小牧〓支笏湖〓小樽〓芦別〓名寄〓稚内〓名寄〓稚内〓宗谷〓旭川  
愛知・蒲郡で月を見ていると靖の記述にある。

十月一〓五日

北九州・「週刊朝日」の講演旅行。講師・板西志保 渡辺紳一郎

旅先・東京発〓福岡〓飯塚〓佐賀〓大牟田〓東京

十一月四く十一日

山陽地方・文芸春秋社の講演旅行。講師・小島政二郎 木村義雄 中島健蔵 横山隆一

● 東京 尾道 広島 宇部 下関 岩国 京都

十一月

富士五湖・甲府からまわる。「サンデー毎日」連載「魔の季節」取材のため。

十二月

奈良・十津河ダムに行く。

十二月十日く十三日

鹿児島・「別冊文芸春秋」の紀行文のため佐多岬をまわる。(出発日・十一日?)

● 東京く鹿児島く指宿く大泊く東京

十二月

熱海・文芸春秋社の忘年会参加で行く。

一九五五(昭和三十)年

四十八歳

一月二日く四日

飛騨・高山の正月を見る。 ● 一 岐阜 二 高山 三 高山 四 高山

一月末く二月

静岡・「小説新潮」の「作家故郷へ行く」の取材に行く。

● 一 浜松弁天島 二 焼津く清水 三 興津く吉原く湯ヶ島

二月下旬

富士五湖・「魔の季節」の取材のため。

三月

奈良・「婦人画報」に「法隆寺」を書くため何回か法隆寺訪問。

三月十四く十九日

近畿・「サンデー毎日」の講演旅行。 ● 阿部真之助 横山隆一 富田英三

● 十四 京都 十五 京都 十六 大阪 十七 神戸 十八 姫路

三月下旬

天龍・浜松く三方ヶ原く二俣く天龍川に沿って佐久間へ。佐久間ダム取材。

五月

奈良・唐招提寺の講堂で一群の破損仏を見る。

五月二十三日く二十六日山陰地方・「サンデー毎日」の講演旅行。 ● 源氏鶏太 横山泰三

七月十二日頃

北海道・文芸春秋新社の講演旅行。

・白井吉見 河盛好藏

・二十三〥舞鶴 二十四〥鳥取 二十五〥米子 二十六〥松江

九月前後

銚子・銚子で月を見ている。

・十二日〥旭川で講演。美唄 旭川 北見 網走 上川をまわる。

十月

東北・角川書店の講演旅行。

・花巻 盛岡 松島 上ノ山 山形 福島

十二月

近畿地方・「満ちてくる潮」取材で熊野川流域に。

・五条 木津川 新宮 登呂

一九五六(昭和三十一年) 四十九歳

一月二〇七日

北陸・金沢から福井を経て帰る。

一月末

神戸・甲南大学の講演に行く。

一月

大阪・新民外外交調査会の講演に行く。

三月下旬

佐久間・佐久間ダム取材。昭和三十年五月と同じ行程。

四月初旬

関西・京都 奈良 大阪 神戸

五月初

興津・「毎日新聞」連載「満ちて来る潮」の取材に。

五月二十〇〜二十三

中部地方・角川書店の講演旅行。

・甲府 静岡 清水 浜松

五月二十七日

沼津・前田千寸祝賀会に出席のため。

六月二十四〜二十八

東海地方・文芸春秋社の講演会旅行。

・阿部真之助 永井龍男 加藤芳郎

二十四〥島田 二十五〥豊橋 二十六〥多治見 二十七〥一宮 二十八〥帰宅

七月五日

福井・四校柔道部先輩の選挙応援演説に行く。

七月七〜八日 富士宮・中学時代の友人の依頼で講演する。

七月十二〜十三日 尾瀬沼・取材に行く。十一日〓夜行発

七月十四〜十五日 会津若松・「週間朝日」の講演旅行。

七月十六〜十七日 京都・「婦人画報」に祇園祭のことを書くため。

九月 東北地方・「週間朝日」講演旅行。講師・白井吉見 藤巻・八戸 宮古 釜石 花巻

九月下旬 穂高・月見をするため。途中「氷壁」素材となる話をきく。初めての穂高。

十一月 九州・角川書店の講演旅行。講師・芹沢光治郎 石坂洋次郎 藤丸・佐賀 長崎 熊本

十二月 上高地・「氷壁」の取材に行く。同行・生澤朗 安川茂雄

十二月 熱海・文春忘年会に参加。同行・横山隆一 宮田重雄 北条誠 河盛好蔵 永井龍男

大岡昇平 高見順 小野佐世男 源氏鶏太 眞杉静枝 亀井勝一郎 井上友一郎

一九五七(昭和三十一年) 五十歳

三月二十〜二十二日 北海道・北海タイムス社主催の講演旅行。講師・高橋義孝 藤巻・札幌 小樽

三月末〜四月初 京都・同行・永井龍男 井伏鱒二 河盛好蔵 大文字屋宿泊(三月二十九〜四月二日?)

四月二十六日 大阪・ペンクラブ主催のエレンブルグ来日記念講演会のために行く。

四月二十八日 京都・岳父足立文太郎十三回忌のために行く。

五月上旬 穂高・上高地〜徳澤小屋へ。カエルの冬眠明けを見る。「氷壁」取材のため。

五月二十六日 北上・文芸春秋社の文化講演会のため。講師・中山義秀 川上徹太郎 杉浦幸雄

六月六日 奈良・唐招提寺の開山忌に戦後初めて鑑真和上像をみる。

六月

東北・文芸春秋社の講演旅行。講師・角川源義 芹沢光治 小林秀雄

七月五日

穂高・「氷壁」の取材。同行・瓜生卓造 安川茂雄 生澤朗 カエル会友人達

九月十〜十一日

那須・朝日新聞の關係で那須へ行く。

十二月十七〜十八日

湯ヶ島・「海峡」取材のため。伊豆湯ヶ島で小鳥の声を録音。同行・福田豊四郎

一九五八(昭和三十三年) 五十一歳

三月三〜六日

青森・下北半島風間浦村下風呂温泉で「海峡」の取材に行く。同行・福田豊四郎

四月二十四〜二十五日

大阪・中央公論社「谷崎潤一郎全集」記念講演のため。二十五日〓大阪・講演する。

五月五〜六日

福島・「ある落日」の取材。福島競馬場で取材。同行・今東光 谷崎潤一郎 有吉佐和子 伊東整 十返肇

五月十六〜十七日

熱海・講演会。

五月

滋賀・湖畔に点在する城址を見てまわる。同行・大津く安土く長浜く小谷

六月六日〜九日

中部地方・「週刊朝日」の講演旅行。講師・大宅莊一 中野好夫 原佐・六〓清水

六月十九〜二十日

岐阜・鶴飼見物に行く。十九日〓小中学校校長会で講演する。

六月二十九日

大仁・沼津中学時代の同窓会に参加。

七月六〜九日

穂高・同行・瓜生卓造 長越茂雄 生沢朗 野村尚吾 小松伸六 福田宏年 三木淳

七月十〜十一日

名古屋・十一日の講演のために行く。

七月十四日〜十五日

日光・鬼怒川見物。同行・源氏鶏太、三宅艶子、河盛好蔵

八月二〜七日

北九州・夏期講座に出席のため。 **原**・門司 八幡 戸畑 若松 小倉 下関

八月三十一〜九月二日

湯ヶ島・三十一日 沼津駅前碑の除幕式に参列のためか？

九月二十三〜二十五日

湯ヶ島・二十四日 足立長造、すがの墓が建つため故郷に行く。

十月十三〜十五日

大阪・「芸術新潮」の取材。十六日から四国旅行へと続く。

十月十六〜二十一日

四国・文芸春秋社主催の講演旅行。 **講**・大仏次郎 亀井勝一郎 小野詮造 加藤芳郎  
向井坊寿両 **原**・大阪 坂出 新居浜 今治 宇和島 京都 不明。

十一月十四〜十五日

新潟・角川書店主催の講演旅行。

十一月二十九〜二日

九州・延岡市でのNHK公開録音講演会のために行く。 **講**・大河内一男

十二月十三〜十六日

湯ヶ島・行く道で狩野川台風以来の惨状を見る。 **原**・羽田 福岡 小倉 別府 延岡 宮崎 福岡 羽田

十二月二十八〜一日

信州・「小説新潮」の「取材紀行」のため。同誌連載「兵鼓」取材をかねての旅行。

一九五九(昭和三十四)年 五十二歳

一月十四〜十七日

沼津・十五日 沼津と三島で成人式の講演をする。

二月十三〜十九日

**原**・沼津 三島 富士 甲府 湯村 清里 東京  
**原**・沼津 三島 富士 甲府 湯村 清里 東京  
**講**・村上元三 池島信平 樋口進

三月二十四〜二十五日

飯田・信越放送と角川書店講演。 **講**・桶谷繁雄 臼井吉見 **原**・上諏訪 遠野 飯田

四月十三〜十七日

湯ヶ島・父隼雄の病状悪化を見舞う。

四月十八〜二十二日

名古屋 京都 博多・「週刊文春」発刊記念の講演旅行。

丹羽文雄 有馬頼義

五月十〜十四日

湯ヶ島・父隼雄の葬儀のために行く。

小林秀雄 高橋義孝 池島信平

東京〜名古屋〜京都〜大阪〜福岡〜羽田

六月二十〜二十一日

秩父・秩父図書館の講演に行く。

夏

伊勢・伊勢の赤福本舗に行っている。

七月八〜十二日

富山・岩波書店の講演。

大内兵衛

小林勇

八日 夜行〜富山(二泊)

七月二十〜二十一日

軽井沢・丹羽文雄

源氏鶏太

七月二十七〜二十九日

上高地・家族旅行。

九月三十〜十月七日

近畿・文芸春秋新社の講演旅行。

高橋義孝

海音寺潮五郎

三十 福知山

十月十九〜二十一日

福島・講演のために行っている。

一 宮津

二 小浜

三 彦根

四 大津石山

五 奈良

六 京都

七 東京

十一月三〜六日

北陸・講演旅行。

杉森久英

三 金沢

四 金沢

五 七尾

六 輪島

十二月十二〜十三日

静岡・十二日 静岡女子短期大学で講演。

十二月二十七日

京都・講談社が関係している旅行。

十二月二十八〜二十九日 志摩半島・取材に行っている。

三十四年?月

紀州・紀勢熊線が通じたばかりの頃、紀州を一周している。

一九六〇(昭和三十五年)年 五十三歳

一月十五日

富士宮・成人式参列

二月二十七～二十九日 伊豆・**同行**・渋沢敬三・五島昇 藤永 後藤基

春（六月一日以前） 滋賀・琵琶湖東岸をまわる。安土城 大津城 膳所城 坂本城 彦根城 長浜 小谷城

四月二十二～三十日 紀勢・文芸春秋新社の講演旅行。**講師**・柴田鍊三郎 中野好夫 小野詮造 金子勝昭

**旅行**・東京～亀山～尾鷲～熊野～熊野～白浜口～東和歌山～大阪二泊～東京

五月十八～二十一日 大阪・十九日「相愛学園」で講演。

五月二十九～三十一日 函館 弘前・NHK公開講演。昭和竜谷技術高等学校で講演。弘前でミイラをみる。

**旅行**・三十一日「函館 北海道～東北～金沢～奈良と続くらしい。

六月四日 金沢・四高の総会で講演。

六月五～七日 奈良・六日「唐招提寺」の「鑑真和上生誕記念法要」の講演会のため。

六月十二日 沼津・前田千寸氏出版記念会参加のため。

六月十六～十八日 信州・岩波書店の講演旅行。**旅行**・松本 長野 甲府 **講師**・大内兵衛

七月九日 酒田・ミイラ見学。**旅行**・八日「上野発夜行」酒田市～鶴岡市～夜行発酒田～上野

十二月十五～十九日 名古屋・十五日「名古屋・CBC創立十周年記念の講演」**講師**・有沢広己 茅誠司

一九六一（昭和三十六）年 五十四歳

二月二十二日 富士・吉原工業高校へ校歌作詞のため。

五月二～四日 岐阜・講演に行っている。

五月十～十一日 富士・「憂愁平野」の取材。十「浅間神社 十一「朝霧高原、吉原工業高校に行く。

五月十六日～十九日 鶴岡・ミイラ学術団調査に加わって出羽三山地方を見る。十九日「鶴岡北高校で講演。

六月六日～八日 紀州・「補陀落渡海記」取材のため。熊野のミイラを見に行く。

九月二十八～翌月五日 山陰・文芸春秋社の講演旅行。講師・高橋義孝 松本清張

旅先・東京～城崎～米子皆生温泉二泊～出雲～松江～京都～東京

十一月以前 磐梯・「小磐梯」の取材に行く。

十一月十四～十八日 四国・四県・岩波書店の講演旅行。講師・大内兵衛 小林勇

十一月二十～二十一日 福島・「角川書店」の講演旅行。

一九六二(昭和三十七)年 五十五歳

一月十三～十八日 名古屋 大阪 沼津・大阪で成人式講演。名古屋で毎日新聞編集局長会議に参加。

旅先・十三日沼津 十四・十五日大阪 十六・十七日名古屋 十八日帰宅

三月三～七日 関西・講演旅行。同行・小松伸六 三日広島 四日大阪 五日京都 六日京都?

三月十七日 沼津・ロータリークラブ十周年記念に沼津公会堂で講演。

四月四日 沼津・沼津中学同窓会に参加のために行く。

四月二十六～二十八日 大阪・毎日新聞発刊八十年記念講演会のために行く。

四月二十九～三十日 湯ヶ島・大阪の帰途に墓参による。

五月十九～二十日 沼津・沼津市教育委員会の講演会。

六月一～三日 長野・「筑摩書房」の講演旅行。旅先・一日日松本～葛温泉 大町中小学校教員のため

に講演する。二日軽井沢・長野豊野中学で講演。三日帰京

六月二十一～二十四日 札幌・集英社の講演旅行に参加。旅先・札幌三泊 二十二日札幌～旭川～札幌

六月二十九〜三十日 京都・「西域」の取材のため。二十九日京都で竹西寛子、岩村忍と会合。

八月四〜五日 赤倉 池ノ平・家族旅行。

八月二十二〜二十三日 妻良・毎日新聞の「城砦」取材のため。 永田一修 松本昭 生沢朗

九月十二〜十八日 中部地方・文芸春秋新社の講演旅行。 清水コン 松本清張

東京〜三島〜豊橋〜碧南〜多治見〜一宮〜岐阜〜十八日 東京

十月一〜二日 箱根・読売新聞の關係。 石川達三 岩田専太郎 石坂洋次郎 細川？

十月六〜七日 熱海・キャラの会参加のために行く。

十月八日〜十二日 中部地方・「婦人公論」の講演旅行。 松本清張 幸田文

八 岐阜 九 浦郡 十一 名古屋 十二 名古屋〜静岡

十月十三日 富士・吉原工業高校へ校歌作詞の關係で学校へ行く。

十月三十〜翌月一日 東北・岩波書店講演旅行。 辻清明 三十一 弘前〜秋田〜山形〜二 上野

十二月十〜十三日 長崎・『城砦』取材。 生沢朗

一九六三(昭和三十八)年 五十六歳

二月九日〜十日 下田・五島昇

三月九〜十一日 沼津・十日に沼津市千本浜で文学碑除幕に参列。

四月四〜八日 伊豆・五日 伊東・伊東清泉郷に支那事変の戦友を招待。 七日 下田

四月十一日 大阪・市長の応援演説に行く。

六月九〜十日 大阪・四天王寺。曾野綾子とともに知人宅に招待される。

六月十五〜二十一日 北海道・佐藤春夫夫妻と一周旅行。 ■ 竹田敏道 福田宏年

■ 羽田〜札幌〜網走〜弟子屈〜阿寒湖〜釧路〜小樽〜羽田

七月十八日 金沢・観光会館で講演。

九月十三〜十五日 木曾・十四日 木曾羽島市教育委員会で講演。

十一月十五日 富士・十五日 吉原工業高校校舎と斉藤記念館落成式に校歌発表及び講演をする。

一九六四(昭和三十九)年 五十七歳

一月十二〜十四日 湯ヶ島・十三日 湯ヶ島小学校で講演。 ■ 婦人公論記者 カメラマン

一月二十九〜三十日 博多・「中央論社」の講演旅行。 ■ 大岡昇平 小林秀雄 円地文子

二月二十日 富士市・ ■ 田村? 渡辺?

三月二十日〜二十一日 湯ヶ島・熊野山墓地慰霊碑除幕式に出席、講演する。

三月二十七〜四月一日 近畿地方・文芸春秋新社の講演旅行。 ■ 有馬頼義 大江健三郎

■ 東京〜岐阜〜松坂〜宝塚〜赤穂〜京都〜東京

四月二十八日〜三十日 長野・市で開催された「耳で物を聞く会」で講演。

五月五〜六日 茨城・大洗市に「婦人クラブ」の関係で取材に行く。

六月六日前後か 奈良・唐招提寺開山忌に行く。

九月十二日〜十四日頃 穂高・穂高に登る。 ■ 山本健吉など「かえる会」友人達と共に。

十月三〜四日 沼津・「夏草冬湊」の取材で三島や沼津をまわる。

十一月五〜六日 山梨・「週刊朝日」の仕事で夜叉神峠の紅葉を見に行く。

十一月二十八、三十日 京都・堂本家へ弔問に行く。

一九六五(昭和四十)年 五十八歳

三月十、十四日

近畿・**旅先**・十、名古屋 十一、京都 十二、奈良 十三、奈良 十四、大阪

四月十六日

湯ヶ島・父隼雄七公司法要のため。十七日、三島、長野、葦山周辺遺跡をまわる。

七月七、十日

東北・「中央公論」「婦人公論」の講演旅行。**講師**・平林たい子 蘆原英了

七月十八、十九日

**旅先**・七、東京、新潟 八、長岡泊 九、富山泊 十、金沢、夜行で東京

八月二十八日

京都・十九日、比叡山で講演。

十月二、四日

長野・全日本仏教協会での講演。

十月七日、十二日

伊豆・家族旅行。**旅先**・二、下田 三、湯ヶ島、修善寺、堂ヶ島宿泊 四、東京へ

十一月三、五日

山陰・文芸春秋社の講演旅行。**講師**・奥野信太郎 西川辰美 **旅先**・七、東京、京都

十一月十三、十四日

八、鳥取 九、浜田市 十、安来 十一、京都 十二、帰宅

十一月二十七、二十九日

京都・橋本家に弔問に行く。四、五日、川奈

十一月二十八日

下田・大浜に行く。夜釣りを見に? **同行**・五島昇

十一月二十七、二十九日 広島・二十八日、夜に広島医師会で講演。

一九六六(昭和四十一)年 五十九歳

一月十八、十九日

大阪・文芸春秋社の講演。**講師**・石川達三 十九日、中之島公会堂

二月二十七、二十八日

湯ヶ島・二十八日、湯ヶ島小学校で講演。

三月十三、十四日

日光・湯の湖・「かえる会」の旅行。

三月二十七～二十九日 伊勢・文芸春秋社の講演。「おろしや國酔夢譚」取材。二十九日||白子

四月十七日 伊那高遠・「化石」取材のため。||森田正治 生沢朗

七月二日～五日 京都・**隆佳**・二||京都・京大病院に今日出海を見舞う。三||京都～大阪・植田寿蔵訪問。

四||大阪・竹中郁 足立卷一 井上吉次郎他と会う。五||帰宅

十月二十二～二十三日 金沢・二十三日||四高創立八十周年記念大会で講演。||平沢興 高坂正顕

十月二十五～二十七日 関東・文芸春秋社の講演。||横山隆一 中野好夫 **隆佳**・柏～今市～高崎

十一月十日 静岡・全国高等学校長会議で講演。

一九六七(昭和四十二年) 六十歳

二月十二～十四日 沼津・十四日||沼津の駿河銀行で講演。

三月二十五～二十七日 湯ヶ島・二十六日||かえる会友人たちと還暦を祝う。

四月二十二～二十四日 大阪・二十三日||大阪小学校教員ための講演。

五月五～七日 軽井沢・家族による還暦祝いのため。

十月二十七～三十一日 中国地方・講演に。**隆佳**・二十八||出雲 二十九||米子 三十日||京都 三十一||奈良

秋 奈良・東大寺の結解料理を食べる目的のために行く。||**隆佳**・広津和郎

十一月十一～十三日 静岡・出版印刷文化展で講演。十二～十三日||伊豆・湯ヶ島?

十二月一～三日 名古屋・一||湯川(秀樹?)と対談。**隆佳**・名古屋～熱海 二||熱海で沼津中学同窓会。

一九六八(昭和四十三)年 六十一歳

二月八日 京都・京都文化財保護委員会主催の講演会で講演。

三月三十日～四月二日 京都・淡交社「宮廷の庭」取材に桂離宮に行く。

四月五日～八日 北陸・毎日新聞「夜の声」取材旅行。●若狭～京都へ。

四月十六日 島田・市制二十周年記念で島田市と「話しを聞く市民の会」で講演。●藤枝静男

六月三十日～七月四日 北海道・「おろしや國酔夢譚」の取材に。●羽田～根室～札幌～函館～函館～羽田

十月一日～三日 金沢・二日～高岡中学校で講演。

十月十四日～十七日 近畿・「婦人公論」の講演旅行。●司馬遼太郎 森村桂

十月二十四日～二十八日 東北・光村図書出版主催「国語教育研究協議会」の講演旅行。●十四～京都 十五～大阪 十六～大阪～神戸～大阪 十七～和歌山

十一月二十八日～二十九日 湯ヶ島・沼津ライオンズクラブで講演。夜は沼津中学同窓会。

十二月五日～六日 鈴鹿・鈴鹿市市民会館完成記念の文芸講演に講演。五日～鈴鹿で講演。

十二月二十八日～三十一日 近畿・「サンデー毎日」の「額田女君」取材旅行。●上村松皇

十二月三十日～三十一日 京都・岩波書店「わだつみ」の取材に行く。三十一日～帰宅

一九六九(昭和四十四)年 六十二歳

二月十九日～二十日 湯ヶ島・十九日～祖母かこの五十回忌法要を営む。

三月二十九日～四月一日 近畿・●三十～京都・足立家法事 三十一～大阪・毎日放送訪問 一～京都～東京

四月二十七日～二十九日 奈良・平凡社『太陽』の特集「万葉のふるさと」取材旅行。

五月十四〜十七日 金沢・「北の海」の取材。同行・風間完 同行・十四〜十五日金沢 十六日能登 畠山

武道館で講演。十七日能登く飯田く帰京

七月七〜九日 軽井沢・九日軽井沢文化協会で講演。同行・山本健吉夫妻

八月十五日〜十六日 徳島・三木武夫の招待で阿波踊り見物。

九月九〜十日 沼津・沼津市市歌つくりのために行く。梅原猛と会合。

十一月十三〜十五日 広島・中国地方国語教育研究会で講演。

十一月三十〜十二月二日金沢・「北の海」の取材のため。一日能登・畠山武道館。夜に講演。

十二月二十九〜三十日 京都・NHK元日放送録音で吉川幸次郎と対談のために行く。

一九七〇(昭和四十五)年 六十三歳

三月十三〜十五日 大阪・万国博覧会開会式に招かれて行く。

三月三十〜三十一日 湯ヶ島・三十日蕪山小学校で講演。

四月七〜九日 石川・八日畠山道場開きに出席。同行・竹林八郎 新保千代

五月十二〜十四日 徳高・同行・東山魁夷夫妻。川端康成夫妻に誘われた旅。徳高二泊後、靖は上高地へ。

五月二十五日 名古屋・毎日新聞主催の文化講演会で講演。

五月三十〜三十一日 湯ヶ島・三十日沼津芹沢文学館開館式で講演

六月八日 静岡・市の西武百貨店で講演(開店記念?)。静岡県立図書館開館記念講演会で講演。

九月十三〜十四日 湯ヶ島・足立文太郎の碑の石の下見に行く。

九月十六〜十九日

富山・新潟・文化庁主催の講演旅行。

九月二十八日

沼津・知人の夫人葬儀のため。

九月三十〜十月一日

大阪・友人の關係で。

十一月二〜三日

静岡・三日〓何かの除幕式に参列。

十一月八〜九日

名古屋・犬山の明治村に移築の無声堂の關係。

十一月十七〜十九日

近畿・朝日新聞社主催講演。

■ 十七〓大阪

十八〓奈良・文春の取材で室生寺訪問。

十一月二十五〜二十六日大阪・万博跡地に關しての仕事で行く。

十一月二十八日

静岡・校歌作詞に關して「沼津ろう学校」訪問。清水市で講演。

■

沼津 清水

一九七一(昭和四十六)年 六十四歳

一月十九〜二十一日

奈良・京都・「美しきものとの出会い」取材。

二月十〜十一日

沼津・沼津東高等学校で講演。

二月十三〜十五日

奈良・「美しきものとの出会い」取材。

四月一日〜三日

湯ヶ島・一日〓足立文太郎の碑の除幕。

四月九〜十日

大津・「美しきものとの出会い」取材で琵琶湖、渡岸寺を訪問。

春

吉野・天水分神社の女神座像を見る。

五月一〜二日

湯ヶ島・一日〓亡父隼雄の十三回忌のために行く。

五月七日〜八日

静岡・七日〓近代文学館主催の講演のために行く。

五月九〜十一日

関西・「美しきものとの出会い」取材で小塔を見る。

■

九〓東京〜京都

十〓奈良

六月六〜八日

関西・「美しきものとの出会い」取材。

京都、奈良 六〇唐招提寺 七〇秋篠寺

九月四〜七日

京都・「星と祭」取材、ヒマラヤ旅打会わせ。

四〇京都 五〇近江 六〇高野山

十月二十三〜二十五日

金沢・四高大会総会及び同窓会のため。

一九七二(昭和四十七)年 六十五歳

一月十四〜十八日

近畿・「美しきものとの出会い」取材に行く。

一四〜十五〇京都 奈良で石舞台、石仏を見る。十六〜十八〇伊勢

三月十八〜十九日

名古屋 大阪・十八日〇明治村七周年記念に講演。十九日〇大阪・司馬遼太郎と対談

一六〇東京〜名古屋〜犬山〜大阪〜東京

四月七〜九日

佐渡・「四角な舟」の取材旅行。七〇上野〜佐渡 八〇佐渡 九〇帰宅

四月十四〜十五日

福井・「美しきものとの出会い」取材。小浜市の十一面観音を見る。教育委員会で講演。

四月二十五〜二十八日

奈良・京都・「美しきものとの出会い」の取材らしい。二十六〜二十八日〇京都

五月二十五〜二十七日

滋賀・琵琶湖周辺を巡る。

六月十一〜十三日

東北・復元された中尊寺の金堂を見る。平泉は初めて。

六月十八〜十九日

京都・奈良・十一面観音を見る。十九日〇京都

七月一〜二日

福島・白川城址を見学。関係者・多田 会田(四高の友人関係者)

七月二十四日

沼津・駿河平「井上文学館」起工式に参列。

十月十〜十一日

山形・親戚訪問。

十一月四〜六日

京都・奈良・四〇滋賀県高月町渡岸寺で講演。五〇明日香村道標除幕式 六〇正倉院展

十一月十九日 郡山・知人見舞いに行っている。

十一月二十九日 水戸・光村図書出版の講演。

十二月二三日 沼津・沼津中学同窓会参加。

一九七三(昭和四十八)年 六十六歳

一月十九日 湯ヶ島・ソ連作家の招待に關係して。

一月二十五日 湯ヶ島・鷹の羽会参加。 竹林八郎

三月二日 湯ヶ島・天城中学校の校歌発表日・靖出欠不明。

三月二十八日 京都・二十九日 京都蔵ノ内お茶事に出席。

四月十二日 奈良 京都・ 十二日 奈良 十三日 奈良 京都

四月十四日 京都・京都会館で仏教賛歌の「親鸞」の発表会のため。

六月以前 高野山・靖の記述による。

九月二十一日 奈良・奈良二泊 二十三日 桜井市文化会館で講演。京都泊 二十四日 帰宅

十月十一日 沼津・文学館の關係らしい。

十月十九日 徳島・「講談社」の講演会。高知をまわる。

十一月四日 金沢・泉鏡花賞の第一回受賞式に記念講演。

十一月二十二日 湯ヶ島・母やえ死去。二十四日 葬儀。二十五日 「井上文学館」開館式及び碑除幕式出席。

二十六日 富士宮市で講演。

十二月十五日 熱海・十五日 熱海 十六日 母やえの四十九日。

一九七四(昭和四十九)年 六十七歳

四月二七〜二八日 愛知・明治村に無声堂移転、入魂式に出席。

八月二十八日 軽井沢・雑誌『俳句』のため山本健吉と「利休と芭蕉」について対談。

九月十二〜十五日 穂高・十年ぶりに瀬沢へ行く。

十月十四〜十八日 北陸・文芸春秋社の講演会で講演。● 松本清張 石川達三 井上ひさし

十月三十一〜翌月二日 京都・岩波書店の文化講演のため。● 都留重人

十一月九〜十日 湯ヶ島・母やえの一週忌のために行く。

十一月三十〜十二月一日 沼津・沼津中学同窓会に出席のため。

十二月八日〜十日 京都・京都御所 桂離宮 仙洞御所の庭園を見る。

一九七五(昭和五十)年 六十八歳

一月二十五〜二十七日 京都・京都博物館で鉄斎の作品を見る。

三月八日 湯ヶ島・湯ヶ島小学校の体育館落成式の記念講演。

三月十一〜十五日 奈良・東大寺のお水取り見る。仙洞御所 京都御所 修学院 桂離宮を拝観。

● 十一〜十三 奈良 十四〜十五 京都

三月二十八〜三十日 石川・内灘の井上靖文学碑除幕式に出席。● 二十八 金沢 二十九 内灘

五月一日 沼津・文学館訪問。

六月二十八〜三十日 秋田・湯沢に行く。

七月六〜八日 金沢・六日〓石川近代文学館の会員で井上靖を囲む会をしている。

八月一〜二日 沼津・二日〓沼津文学館に行く。

八月二十五〜二十七日 長野・**四日**・平山郁夫

九月十六日 京都・堂本印象の葬儀のため赴く。

九月十九日〜二十日 奈良・東山魁夷の招きにより奈良唐招提寺で観月の会に参加。

十月九〜十二日 穂高・「かえる会」で紅葉を見に行く。

十一月二十九〜三十日 富士宮・二十九〓富士宮・御殿場図書館で講演。三十〓沼津の井上文学館の講演。

十二月六〜七日 新潟・講演旅行。

十二月十九〜二十一日 京都・二十〓妙喜庵に行く。二十一〓京都経済同友会主催の講演。

一九七六(昭和五十一)年 六十九歳

一月八日〜十一日 沖繩・沖繩海洋博覧会に招かれる。**四日**・山本健吉 遠藤周作 北杜夫 福田宏年

三月二十六〜二十八日 宮城・二十六〓日中文化交流協会の関係で王炳南の一団を接待するため仙台へ行く。

二十七〓小牛田町・千葉亀雄文学碑を訪問。公民館で講演。小牛田町で一泊。

春 京都・表千家の同門会の記念茶会に出席。**四日**・湯木貞一

四月二十六〜二十八日 秋田・羽後 二十七日〓作詞の羽後中学校校歌発表会に出席。

四月三十〜五月二日 京都・京都博物館主催の「日本国宝展」開会式に出席。

五月十〜十三日 京都 奈良・日本文化財保護審議会委員として高松塚古墳などを視察。

五月二十二〜二十四日 京都・取材のため京都醍醐寺を訪れる。

十月十六〜十八日 京都 宝塚・講談社の座談会。十七日宝塚・鉄州に關係。十八日宝塚へ帰宅

十月二十三〜二十五日 金沢・作詞の私立北陸大学校歌作詩の発表会に行く。

十月二十八〜三十一日 穂高・三十年來の猛吹雪にみまわれ、三日間徳沢小屋泊まり。

十一月五〜七日 金沢・六日金沢中小企業会館講演。七日泉鏡花賞の会出席。

一九七七(昭和五十二)年 七十歳

二月十九日 沼津・井上文学館に行く。祝いの会に参加。

三月十九日 箱根・三井家の茶道具を見る。

五月十四〜十五日 大阪・大阪府立医大で足立文太郎胸像除幕式参加。

五月十九〜二十日 北九州・箱崎 文化財保護審議会委員として視察。

五月二十一日 箱根・強羅「石葉亭」で友人たちと山本健吉の古希を祝う。

六月二十七〜二十八日 京都・淡交社の關係。

七月七日〜九日 仙台 盛岡・岩波文化講演会の講演に行く。

七月二十三〜二十五日 滋賀 京都・琵琶湖周辺の十一面觀音の寺をまわる。

八月一〜三日 伊豆・三日「井上靖文学館」で講演。

九月十三〜十五日 長崎・八十二銀行で講演。山口・山本健吉 今里広記

十月一〜二日 名古屋・中華人民共和国出土文物展に行く。

十月四日〜七日 穂高・紅葉を見に行く。

十一月五〜六日 沼津・五日沼津市駿河ホールで講演。「シルクロードの旅」。六日沼津中学同窓会。

十一月十八〜二十日 大阪・十九日 大阪府立医大で講演する。

十二月三〜五日 京都・表千家茶道具を見る。

一九七八(昭和五十三)年 七十一歳

二月三〜五日 京都・生産性本部のため講演。

二月十七〜十八日 京都・文化財保護審議会委員として赴く。

三月十三〜十四日 奈良・東大寺のお水取りを見る。 三木武夫夫妻

四月二十二〜二十三日 滋賀県・渡岸寺を訪れる。

六月二十四〜二十七日 京都 大阪・二十六日 大阪朝日生命ホールで講演。

八月十七〜十九日 箱根・十八日 拉拉ラの会。

八月二十五〜二十八 鳥取 京都・二十六 鳥取県日南町の井上靖文学碑の除幕式に出席、日南中学校で講演。

原案・二十六 鳥取 二十七 京都 二十八 帰宅

九月九〜十一日 岐阜・九日 可児市市立図書館完成記念の記念講演。

九月二十九〜十月二日 穂高・涸沢よりパノラマコースをおり奥又白墓参。

十一月五日 沼津・精華高校に関係した仕事で行く。

十一月八日〜十日 金沢・八 講演。九 石川近代文学館開館十周年記念と第六回泉鏡花賞授賞式で講演。

十一月十七〜十八日 京都・十七日 ペンクラブ京都例会で講演。

十一月三十〜十二月三日 福山・文化財保護審議会視察のため。 大三島 大山根神社 二日 松山城

十二月十六〜十七日 滋賀・十六日 滋賀県高月町で講演。

一九七九(昭和五十四)年 七十二歳

一月二十六〜二十八日 京都・二十七日 修学院離宮。

三月十三〜十四日 奈良・お水取り見学。

三月二十〜二十一日 京都・樋口隆康に關係のこと。

四月二十四〜二十五日 大阪・二十五日 大阪・石浜文庫開設第一回記念講演会で講演。講師・西田竜雄

五月二十一〜二十五日 京都 奈良 箱根・中国作家代表团に同行。二十五日 箱根で団長の周楊と座談会。

六月九〜十一日 滋賀 京都・九日 渡岸寺

六月二十〜二十一日 神戸・「敦煌―壁画芸術と井上靖の詩情展」大丸神戸店にてテープカットのため。

九月二十九〜三十日 穂高・カエル会

十一月三〜六日 近畿・日中文化交流協会関係。同行・常書鴻 展覧・三 京都 五 天理で講演 奈良

十一月十三〜十五日 北海道・北海道新聞社、集英社の講演。十四日 旭川で講演。夜、三浦綾子夫妻の招宴。

十一月十七〜十八日 沼津・駿河ホールで講演。沼津中学同窓会に参加。

一九八〇(昭和五十五)年 七十三歳

一月十三〜十四日 滋賀 京都・渡岸寺を訪れる。

三月十二〜十四日 大阪・十二日 大阪プラザホテルで「竹中郁ボルカマズルカ」の出版と、読売文学賞

受賞作品「井上靖全詩集」との出版記念合同祝賀会を行う。

七月二十〜二十一日 湯ヶ島・「昭和の森会館」開館式に出席。昭和の森開館の碑の除幕式。

七月二十四〜二十五日 宮城・二十四日に講演をしている。 仙台 松島

九月三十日

大津・大津市で講演。

十月十四日

近畿・講演のため。〔旅籠〕・十四〥奈良 十五〥京都 十六〥大阪

十一月十五日

三島・日大三島校で比較文学の講演をする。

十一月二十九日

新潟・三十日〥新潟総合テレビの講演。

十二月二日

静岡・静岡日生ビルでNHK静岡支局の「シルクロード公開講座」のために講演。

十二月十二日

湯ヶ島・かえる会の集まり。

一九八一(昭和五十六)年 七十四歳

三月十五日

湯ヶ島・湯ヶ島小学校で井上靖文学碑の除幕式。

五月九日

湯河原・沼津中学の会「ノコ会」。

六月十一日

福島・〔旅籠〕・十二〥会田病院訪問。十三〥猪苗代湖〥会津若松〥上野

六月二十九日

名古屋・中日新聞の講演。

八月二日

北海道・〔旅籠〕・三〥札幌 四〥函館 昭和女子学園高校創立五十周年講演。

十一月六日

上高地・雪が多く初めから上に登のをあきらめて徳沢小屋に一泊。

十一月十九日

近畿・〔旅籠〕・十九〥岐阜 二十〥京都・ペン例会 二十一〥大阪・朝日放送の講演。

一九八二(昭和五十七)年 七十五歳

二月三日

京都・〔旅籠〕・三〥東京発 四〥渡岸寺 五〥京都〥東京

四月二十四日

湯ヶ島・「胤銃」の文学碑の除幕式に参列。

五月十五日

沼津・沼津市スルガホールで講演。

六月十九〜二十日 箱根・日中国交正常化十周年記念の来日客接待関係。

六月二十六〜二十八日 金沢・二十七日日徳田秋声の墓碑除幕式の碑銘執筆者として参列。

七月一日 沼津・沼津市民会館。

八月二十〜二十一日 大阪・ペン大阪セミナー。

十月十六〜十七日 滋賀・十七日渡岸寺で井上靖文学碑の除幕式。[補遺]・淡交社の白井夫妻

十一月十一〜十三日 金沢・十一日鏡花記念文学賞十周年に出席、徳田秋声墓碑参拝。[補遺]・瀬戸内晴美

十一月十九〜二十一日 京都 十九?日京都ペンの例会。二十日奈良 二十一日奈良・講演する。

一九八三(昭和五十八)年 七十六歳

二月七〜九日 沖繩・講演

三月十三〜十四日 京都・十四日桑原と会っている。

五月六〜七日 静岡・六日沼津で講演。七日静岡東海大学社会福祉教育センター一周年記念で講演。

六月十八〜二十日 伊豆・十八日下田ロータリークラブで講演。十九日湯ヶ島の家の移転。二十日湯ヶ島・

「猟銃」碑二回目の除幕式。

七月一〜二日 沼津・一日沼津市市民センターで「沼津名誉市民賞」を贈呈される。記念講演。

八月三十一日 硫黄島・「鎮魂の丘」の碑の竣工日、建立式典に参列。

九月九日 硫黄島碑建立の除幕式。

十月二十六〜二十七日 滋賀・渡岸寺。

十一月六〜七日 湯河原・沼津中学同窓会。

十一月十九〜二十日 金沢・十九日〓四高創立九十五周年?全国大会記念講演。

十一月二十五〜二十六日京都・ペン京都例会。

十二月三〜四日 大仁・カエル会忘年会。

一九八四(昭和五十九)年 七十七歳

二月二十三〜二十四日 大阪・高島屋大阪店「井上靖展―美しきものとの出会い」展のために行く。

三月十二〜十四日 奈良・お水取り見学。 團伊玖磨

四月 大阪・大阪毎日新聞社新社屋に移転に伴って昔の部屋を見に行く。

四月六〜七日 京都・高島屋(「井上靖展―美しきものとの出会い」開催のため?)

四月二十四〜二十五日 富山・二十五日〓北日本新聞文学賞受賞者祝賀会に出席し講演。

五月十九〜二十一日 京都・ペン大会の関係の旅行。十九日〓野村邸でパーティ。

七月九〜十一日 湯ヶ島・昭和の森会館内井上靖展示コーナーに土蔵模型が入る。

八月四〜六日 高野山・五日〓高野山で講演。

八月二十九〜三十日 大津・二十九日〓「世界湖沼環境会議」で講演。

九月二十七〜二十九日 穂高・カエル会で登山。

十月十六〜十八日 京都・十七日〓NHKに関係している旅行。

十一月二日〜五日 長崎・山本健吉碑の除幕式に参加。三日〓除幕式。

十二月十八日 京都・貝塚茂樹文化勲章受章祝いに。

一九八五(昭和六十)年 七十八歳

三月十二〜十三日 沼津・講演をしている。

三月三十〜三十一日 掛川・三十日〓松本亀次郎の除幕式に参列。

四月十九〜二十一日 酒田・二十日〓酒田日和山公園水壁の碑除幕式に出席、講演する。

五月十八〜十九日 北上・十八〓日本現代詩歌文学館「第一回・詩歌文学館の集い」に講演。十九〓花巻市

郊外の高村光太郎の山荘に向かう。

五月二十四〜二十六日 金沢・**外**・二十四〓東京〓金沢 二十五〓七尾

八月三〜五日 湯ヶ島・三〓足立家墓参。四〓「昭和の森創立五周年記念式典」出席する。

十月二十九〜三十日 名古屋・毎日新聞の講演。

十一月九〜十日 湯ヶ島・十日〓両親の法要のために行く。

一九八六(昭和六十一)年 七十九歳

五月十〜十二日 北上・十〓第一回詩歌文学館賞贈賞式に参加。十一〓光太郎山荘を訪れる。

七月五〜八日 広島・松山・講演旅行。**外**・五〓広島 六〓広島 七〓松山 八〓帰京

七月十〜十二日 金沢・十一日〓石川県立美術館「黄河文明展」開会式に出席、都ホテルにて講演。

八月一〜三日 湯ヶ島・盆で帰省。三日〓沼津で講演。

八月十九〜二十日 名古屋・十九〓黄河文明展開会式に出席。二十〓名古屋で講演。

一九八七(昭和六十二)年 八十歳

四月二十四〜二十六日 金沢・二十四日〓除幕式に参列できなかった流星の碑を見る。

十月二十二〜二十六日 奈良 大阪・二十三〓奈良シルクロード博会議で講演。二十四〓四高同窓会 二十五

岸和田で講演。

一九八八(昭和六十三)年 八十一歳

三月十八〜二十日 大阪・十九日大阪毎日新聞の講演。十九〜二十日敦煌・西夏展に行く。

四月十四〜十五日 佐久間・佐久間ダムに行く。

四月十九日 大阪・大阪阪急百貨店の毎日フォーラム「敦煌・西夏を語る」に出席、講演する。

四月二十一〜三十日 奈良・「なら・シルクロード博覧会」開会式に参列。二十五日奈良で講演 二十六日奈良支局で講演。二十八日昭和五年の会。二十九日四高の会。

七月六〜十日 奈良 滋賀・奈良博覧会帰りにまわる。九日彦根

十月九日〜十一日 佐久間・十日天龍川河川敷の井上靖碑除幕式に出席。

一九八九(平成元)年 八十二歳

四月六日 沼津・沼津東高等学校井上靖碑除幕式に出席。沼津キャッスルホテルで講演。

五月十九〜二十一日 京都・十九日ハワイ大学国際会議室で講演。二十日小西財団招宴。

六月二〜三日 湯ヶ島・フランスのテレビの取材撮影の仕事で行く。

六月七日〜九日 青森・風間浦村に三泊。文学碑の関係。

八月一日〜三日 大津・大津三泊 二日ブルーレーク賞受賞式?

九月二十八日〜三十日 青森・下北郡風間浦村の文学碑除幕式に出席のため。三十日碑除幕式に講演する。

十月三〜六日 奈良・法隆寺と飛天に關係の旅行。五日奈良〜高山

一九九〇(平成二)年 八十三歳

四月十八～二十二日 近畿・花博会場の茶室「むらさき亭」訪問。大阪・京都・奈良・東京

五月十八～二十一日 北上・十八回詩歌文学館落成記念式と第五回詩歌文学館賞贈賞式参列。北上市市・仙台市山形 二十回みちのく民族村見学 斎藤茂吉記念館 月山神社

五月二十六～二十八日 岐阜・高山の飛騨民族村文学散歩道碑除幕式参列。二十日講演。二十七日碑除幕式。

八月一日～二日 湯ヶ島・墓参のため。

九月十八日～二十一日 旭川・十九回旭川信用金庫前の文学碑除幕式で講演。二十回旭川市開基百年記念式典で

講演。旭川・旭川美瑛町層雲峡へ二十回層雲峡札幌で見学帰宅

\* 表作成にあたり主に使用した参考書。

『増補・井上靖評伝覚』（福田宏年著・集英社）の「井上靖年譜」

「日中文化交流」（日中文化交流協会発行）

『会報』（芹沢・井上文学館友の会発行）

『井上靖晩年の詩業』（日本現代詩歌文学館振興会発行）

『井上靖とわが町』（静岡県田方郡天城湯ヶ島町発行）

\* なお表中の講師の部分には井上靖名が省略してありますが、井上靖も講師として講演しています。

（表製作者 黒田佳子）

編集後記

今号は、多くの方から励ましのお言葉を頂いたにもかかわらず、発行が遅れてしまったことをまず、お詫びいたします。

特集の国内旅行表が分割しにくい性質上多くの頁を取り、配分のバランスに欠ける印象になりましたが、内容は充実した号であると思っております。

また、この誌を求めてくださるお手紙も何通か届き、編集している者にとっては、うれしいかぎりです。次号への励みになっております。

黒田 佳子

伝書鳩

第五号 一九九八年 十一月 発行

編集者

黒 田 佳 子

連絡

横浜市青葉区新石川 三十八―九

発行

井上靖記念文化財団